

質実剛健

体験して分かる。体験しないと分からない。

10月末に『菊池のんびり農村生活体験』を2泊3日で実施しました。「農業体験」と「野外生活体験」を柱にし、最後は地域の方々やお世話になった施設（きくちふるさと水源交流館）の職員のみなさんと交流会を行いました。「田の中央より南側の方が米はよく実る」ことや手動での脱穀の大変さ、野外調理の難しさ、地域の方々の心の温かさなど、この3日間の体験活動を通して学んだこと、感じたことは数え切れません。この体験をする前と後との「差」はどこに出てくるのでしょうか。

のんびり農業体験

2組は初日（10月26日）に、1組は2日目（27日）に農業体験を行いました。交流館から歩いて40分ほどのところに、池田勝美さんをご厚意で提供してくださった2反の田んぼがありました。その背景にはパノラマの大自然が広がっていました。

到着してまず農業体験を指導してくださる地元のみなさんとの対面。「一つの株から10くらいの穂が出る」とか「茶碗1杯約20円」というお話であった。その後は探究活動。田んぼの「東・西・南・北」に面した所と「中央」の穂を取って来て、どの穂が、一番米粒が多いかを調べました。予想では「南側」が多く、「中央」という生徒も数名。みんなで穂を分け合っ、一粒一粒数えました。結果は(2組の結果)

平均(粒)	東	西	南	北	中央
	98.5	81.2	112.2	73.8	101.6

ということで、予想通り「南側」が一番よく実るということが証明されました。「北側」や「西側」が少なくなるのは、日照（日当たり）から考えることができます。そう考えると、「中央」が多かったのは意外でした。

続いて、いよいよ稲の収穫です。刈り取り方法としては、「手刈り」と「コンバイン」の両方を体験しました。手刈りについては、多くの生徒が小学校時代体験していたようで、農家の方々の指導を仰ぎながらも、意外と上手く刈っていました。1組では、あんまり黙々と刈る姿を見かねた交流館のスタッフの方が「時々周囲の景色も楽しんでもらうといいのですが…」とおっしゃられるほどの熱中ぶりでした。この農業体験で一番好評だったのが、「コンバインの操縦」でした。初めての体験で、だんだん真っ直ぐ操作できるようになることを楽しんでいました。それも丁寧に教えてくださった指導者の方のおかげであることはみんな気づくことができました。



田んぼを提供してくださった池田さん

次は手刈りした稲をくくって「掛け干し」をしました。掛け干しでは、準備してあった竹を持って来て、組み立てるところから体験



させていただきました。指導していただけてくり方が分かった者が、まだ習っていない人に教える光景も見られました。

そのうち「脱穀」に移りました。「掛け干し」していない稲の束をコンバインにかけます。どんどん吸い込まれ、米粒はどんどん袋詰めされ、稲の束は短く裁断され出てきました。また「足踏式脱穀機（あしぶみきだっこき）」も準備していただき、昔ながらの脱穀も体験させていただきました。足でこぎながらの脱穀は非常に難しく、昔の農業の苦労が身を持って感じられました。



足踏式脱穀機（あしぶみきだっこき）

コメ、ムギなどに使用。千歯抜きを改良して、歯の部分が回転するようにした農業機械。大正時代に発明された。

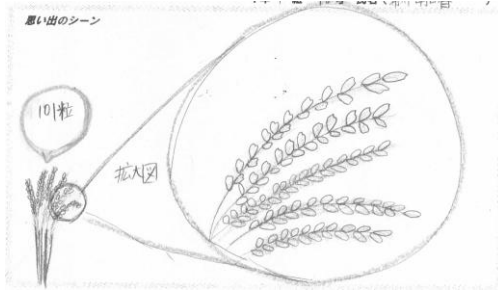
（ウィキペディアより）

のんびりした時間の中で作業が進められ、1反分の稲を刈り終え、脱穀も終わらせることができました。最後に軽トラックに積み込まれた袋を見て収穫された米の多さを実感することができました。



こちら側にペダルがあります。

私は「稲1本で米は何粒か数えたこと」がとても印象に残りました。私が選んだ稲は、101粒ありました。西の担当のみんなと合わせて平均を出すと約97粒でした。東西南北の人たちと比べると、3位くらいで少ないのかなと思いました。米を数えることは意外と難しかったです。米の粒が小さいことでもあります。風が吹いて米が飛んで、正確に米の数を数えることが難しかったです。こんな大変な作業とは思っていませんでしたが、楽しかったので、またこんな活動をしたいです。(浦川 明日香)



私は今回の『菊池のんびり農村生活体験』を通して学んだことは、「自然の大切さ」です。特にそれを感じたのは、甲守先生の講話や山田さんの星座観察です。自然がもしなかったら、田んぼの生物を見ることができないし、きれいな星空を見ることができません。また、人間や生物は生きていけなくなるでしょう。だから、私は自然が大切だと思います。(中川 いぶき)

「カレー作り」は、みんなで分担してやってスムーズに美味しいカレーが作れました。失敗しなかったのが安心しました。脱穀の機械は見たことがなく、どうやって使うのか、本当にこれで脱穀ができるのかなと疑問に思っていました。しかし、やってみると米が1つ残らずとれてびっくりしました。(本田 鈴奈)

農業体験で一番心に残ったのは、稲刈りでコンバインに乗せていただいたことです。最初はまっすぐに進まなくて難しかったけど、農家の方が優しく教えていたおかげで、だんだん慣れて最後の方はまっすぐ進むことができました。3時ごろには、地元の方々がかびるを作ってくださいました。とっても疲れていたのでもってもおもしろかったです。のんびりと農業体験ができてとっても楽しかったです。(原田 加奈子)



田んぼから見た雄大な景色

星座観察

1日目の夜は、山田良二さんを講師にお招きして、星座観察を行いました。山田さんは上天草市龍ヶ岳町のミュージア天文台の指導員をされていた方です。

夕方6時。周りはかなり薄暗くなっていますが、空を見上げると大きな雲がゆっくり流れているのが見えました。このまま夜を迎えても星はあまり見えないのではないかと心配しました。

生徒たちは夕食と入浴を済ませて19時30分を迎えました。前の日までの暖かい気候が



うそのようになっていきました。しかし、心配されていた星空も観察のころには十分見えるくらいまでになっていきました。この寒さ

は「放射冷却(注釈参照)」という現象によるものだったそうです。星を見るためには雲がなくならなければいけないが、雲がなくなると寒くなる、という皮肉な現象でした。



「天体写真の世界」より

簡単に自己紹介された後は、天体望遠鏡で実際に星を見せてくださいました。山田さんが持ってこられたものと学校から持ってきたものの2台を使って、順番に並んで見ました。山田さんの奥さんも一緒に来ていただき、お手伝いをしていただきました。



ほとんどの生徒が天体望遠鏡で星を観察したのは初めてで、よく耳にする「木星」を実際に目にして、みんな興奮気味でした。

放射冷却(現象)

昼間、太陽の光が地表面に当たっている時、地表面は太陽放射を受けて温度が上昇する。逆に夜間は、地表面から宇宙空間に向けての放射があり、地表面の温度は低下する。このとき、大気中に雲が存在すると、雲からの放射を地表面が受けることにより、地表面の温度低下が妨げられる。一方、大気中の水蒸気が少ないよく晴れた夜間(日本では冬季間が代表的)には、地表からの放射はそのまま宇宙空間に放出されるため、地表付近の温度が低下しやすい。この状態を放射冷却と呼ぶ。

(ウィキペディアより)

眞実剛健

『段取り』する力

『菊池のんびり農村生活体験』の大きな柱である「野外生活体験」。ここでは手際良さや協力、見渡す力、先を読む力などがいろんな場面で試されました。テント立てから始まり、薪割り、調理、後片づけ、テントでの就寝、テントの片付けなど。大変な中に楽しいこともたくさんありました。もっと見通しを立てて活動できれば、楽しめる時間ももっとあったかもしれません。しかし、その大変さ自体を経験することも大切なこととは思っています。

がちり野外生活体験

1組は初日(10月26日)に、2組は2日目(27日)に野外生活体験を行いました。「のんびり」のつもりでいたこの野外生活がなかなか手ごたえのある活動になりました。

まずはテント立て。1組はテントを運び出し、おのおの自分たちの設置場所において、交流館の松崎さんや池田さん、アドバイザーの栃原さんや先生方の指導を仰ぎながら組み立てを開始しました。8班もあるのでいくつかの班は自分たちで考えなければいけない状況でした。そこで取りだしたのは説明書でした。闇雲に立て始めるのでは



なく、どうやったらいいのかを冷静に考えていたようでした。阿蘇や無人島でのことを考え、「テント立ての練習」を兼ねていたので、一度立てたテ

ントを畳んでもう一度立てました。2度目は自分たちの力で手際よくできました。やはり「自分たちで考えて」立てた分、身に付いたのでしょう。次の日の2組では、同じ時間帯でテント立てを行いました。2度目のテント立てはできませんでした。それは「説明書を見る姿をあまり見なかった」ことにつながるのかもしれませんが。

おいしい昼食を取った後は薪割りを行いました。夕食や次の日の朝食、五右衛門風呂のためです。今の生活では、鉈を持つ機会もあまりなく、危険も伴うということでもしっかり説明を聞きました。いざ実践となると、なかなか鉈が薪の木に食い込みません。しかし、何度もやっているうちにみんなうまく割れるようになりました。中には硬いものもあり、一人でうまくできないときはもう一人が木で鉈の先端を叩いて割っている姿も見られました。

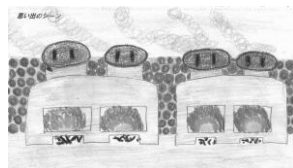


次に火熾しです。焚きつけには杉の枯れ枝がよいと教わり、近くの林の中から取って来ました。



杉は針葉樹の一種で、針葉樹は樹脂(いわゆる「やに」)が豊富に含まれているため、燃えやすいので

す。マッチで火を着けたらすぐに燃え始めます。しかし、なかなか薪に火が移りません。以前学校で火熾しや飯盒炊爨をやっていたので



すが、なかなか思うようにはいきませんでした。栃原さんや先生方のアドバイスや支援を受けながらやっと火が熾りました。

それと同時進行でカレー作りと飯炊きが始ま



っていました。分担当をして仕事をしてはいるものの、何をしたらいいのか分からずうろろしている生徒も見られました。材料を切るとなると、みんなそこに集まり、包丁は各班2本しかないため、眺めるしかない者も。火熾しの方でも、うまく付かないのを見ていたり、材料を切り終えてから、鍋の準備を始めたり。時間はどんどん過ぎて行きました。

「気づき」を待って、スタッフも最小限のアドバイスにとどめていましたが、そうも言っていられない状況になり、『要領』を伝授し始めました。例えば、「材料をある程度切ったら鍋に入れて炒める」、「同時に皿を準備する」など。全体を見て「いかにうまく、手早くできるか」を考えながら作業を進める、ということができていないのが分かりました。すると、少しずつ動きが変わり、薪が必要な時は自分で補充をしたり、作業の指示を出したりするようになって来ました。暗くはなったものの、寒い中おいしいカレーライスを食べました。



質実剛健

発信・受信 ～コミュニケーション～

『菊池のんびり農村生活体験』の最終日は食の文化祭、交流発表会をメインに行いました。食の文化祭では、加工部の方々が心を込めて作られた菊池の郷土料理をおいしくいただきました。その時間を利用して、積極的に地元の方々と会話をする生徒、そうでない生徒と別れてしまいました。交流発表会では文化祭で発表した「宇土の自然から学んだこと」を地域の方々に聞いていただきました。発表はうまくできました。宇土中生は「発信」よりも「受信」の方にやや課題があるのかもしれませんが

食の文化祭

まずは体育館で加工部のみなさんとの対面。自己紹介をしていただきましたが、挨拶の中には地元のPRや我々を歓迎する言葉が織り交ぜられていました。



いよいよ会食の時間です。置いてある料理を囲むようにスタンバイし、「いただきます」の

合図で一斉に料理を取りました。たくさん種類の置いてあり、目移りしながらあれもこれもと皿いっぱい積んで、おのおの座って食事を始めました。

地元でとれた食材を中心に作られた郷土料理。温かいのっぺ汁。自分たちで刈り取ったお米で炊いたお



にぎり。中でもきな粉の団子は人気があり、あっという間になくなってしまいました。あまりのおいしさに、何度もお替わりに行く姿もたくさん



見られました。

ただ残念だったのは、せっかくの機会だったのに、地域の方々と交流が十分できなかったことです。宇土では食べたことのない郷土料理の作り方を聞いたり、菊池の魅力を知りたいという生徒もたくさんいました。しかし、食事が一段落して、加工部のみなさんのところに行って話しかけている生徒たちも



こういう人たちの積極性や行動力は今後宇土中の中でどんどん広がってほしいと思います。



交流発表会

次は交流発表会。文化祭の時発表した内容を菊池のみなさんにも伝えたくて準備してきました。

まずは、『ネイチャーインタープリター(自然の代弁者)』について触れ、



「森林伐採は自然破壊か、自然保護か」の模擬ディベートを見ていただくことを通じて、理解していただきました。

次に、「白山登山」や「御所浦わくわく島体験」のプレゼンテーションを見ていただきました。今回の宿泊教室も合わせて、宇土中学校の豊富な体験活動を紹介できました。

そして、楽しい御所浦の体験とは裏腹に赤潮が発生していたことに触れ、水や自然の大切さやネイチャーインタープリターとしての役割の重要性を伝えました。



最後に、全日本中学生水の作文コンクールで「水資源機構理事長賞」という全国で2番目の成績にあたる賞を受賞した荒木美里さんの作文の朗読

を聞いてもらいました。水の音が聞こえてきそうな荒木さんの臨場感溢れる発表は地元の方々にも十分伝わったようでした

(作文の内容は右欄)。

この後は、地元の方には意見や感想をお願いします。「勉強してきたことがよく分かりました。」と言っていたのですが、厨房担当の溝口さんからは

「先生たちから与えられるものばかりでなく、自分たちで調べたいことを見つけて、調べてみてください。皆さんならできると思いますが、皆さんの力でできると思っています。」と言っていたのが印象に残りました。

最後は元気よくお礼を言って交流発表会を終わりました。



アンケート結果

帰ってきた次の日にアンケートを採りました。その主な項目の結果を下に掲載します。

※4段階評価

4 ← → 1
よく当てはまる 全く当てはまらない

★「稲刈りや、脱穀、精米など体験することの必要性を感じましたか」

1組	4-54%	3-41%	2-3%	1-3%
2組	4-46%	3-49%	2-5%	1-0%

※「1」は体験できなかった人が1人いたことを表します。

★『『菊池のんびり農村生活体験』は楽しかったですか』

1組	4-79%	3-15%	2-5%	1-0%
2組	4-79%	3-21%	2-0%	1-0%

★『『菊池のんびり農村生活体験』は勉強になりましたか』

1組	4-74%	3-26%	2-0%	1-0%
2組	4-69%	3-31%	2-0%	1-0%

その他いろいろな項目を見ても、良い感触のまま終わることができたようです。

「水からのおくり物」

荒木 美里

「あつういねえ。水源に行こうか。」そう言って出かける近くの水源は「轟水源」と言う名前、私の大好きな場所です。

大好きな理由は、いくつかあります。一つ目は、この轟水源は水がきれいなことです。名水百選にも選ばれているほど水が透ききっています。遠くからペットボトルを用意して、水をくみにこられたり、近所の方は井戸水として生活用水に引いていらっしゃることもあります。今もなお使われている上水道では、日本最古のものだそうです。その水は冷たく、透明で、手ですくって飲むと「おいしいっ」と感じます。こんなおいしい水は百年以上の年月がかかってできているそうです。山に雨が降って、その雨がしみこんで土の層を通り、ゆっくりゆっくりきれいになって、湧き出てくると聞きました。今、飲んでいる水はおよそ百年前のものと思うとびっくりします。私は、水がしみこんでいく様子を思い浮かべました。そして、とても歴史ある水だと改めて感じました。

二つ目の理由は、きれいな水の中に、たくさんの生き物がいると言うことです。小さな魚のオイカワや黒エビ、サワガニ、五センチくらいのドンコ、アメンボ、時には牛ガエルのおタマジャクシもいます。こんな生き物を捕まえられるのも轟水源のいいところだと思います。魚が口をパクパクさせたり、スイスイ泳いでいるところがかわいくて、大好きです。

「あつ、そっちに行った。」

「やったあ、捕まえたよ。」

と言う声も聞こえてきます。網を片手に一生懸命追って捕まえることが初めてできた時はとてもうれしかったです。

こんなきれいな水のあるところだからこそたくさんの生き物がよってくるのだと思います。それに、魚を捕まえて飼っていると、新しい発見もありました。それは魚が元気なことです。お店で買った魚に比べて、動きも速く、ビュンビュン泳ぎます。「これも水のおかげなのかな。」と思い、「元気に生きているんだなあ。」と感じました。

三つ目の理由は、子供がたくさん集まっていて、「楽しい！」と言うことです。私は真夏とても暑くて汗だくの日や、涼みたい時に、妹や友達とよく水源に自転車走らせます。みんなで、水の中に飛び込んだり、魚を捕まえたり、泳いだりします。気持ちが良く、楽しいです。また、人も多くてにぎやかです。

「バジャ。」「うわっ、やったな〜。」

「キャー。助けて〜。逃げろ〜。」

と言う楽しそうな声も聞こえてきます。水かけ合戦と言う私達が考えた遊びもあります。水をかけ合って、ぬれないようにするのが、最後にはビショビショになりますが、それが気持ち良くて最高です。

轟水源の周りには木や草花も生えていて、そこで遊ぶと自然に包まれたような気持ちになります。葉の間から見える光に反射する水もすごくきれいです。

でも、もし水源がなかったら、魚が元気に泳ぐことはできません。自然にある木も草花も生きていけないし、百年以上もかけてできたおいしい水も飲むことができません。遊べなくなったら、大好きな場所がなくなり、水かけ合戦もできなくなってしまいます。また、この頃「水を大切に」と言う言葉をよく聞きますが、私は水の大きい役割の一つに、人を楽しませることがあると考えます。私達が水源で、笑ったり、うれしくなったりできるのは、水が人々が楽しめるようにしてくれているのです。これが、「水からのおくり物」だと思います。だから、水を守るために、ゴミを捨てたり、汚ない水を流したりしない事をいつも頭に置いて過ごしていきたいです。

「あつ、おいしい」そう思える水が、いつまでもこの轟水源にあり続けますように。

質実剛健

『タイケンをコトバにする』

第18回目のQ講座は、「菊池のんびり農村生活体験」を終えた翌日に実施されました。講師には、熊本県立大学総合管理学部教授の津曲隆先生とその研究室の学生さん7名をお招きしました。3日間の菊池での「タイケン」を「コトバ」にしていくことを教えていただきました。もちろん、子どもたちにとっては初めての方法で、「知識には遠い・近いという『距離』がある」、「概念ツリー」、「分類は新しい発見のための原動力」などの耳に新しい言葉たちが、生徒たちを引き込んでいきました。3日間の楽しかった体験、思い出に残った体験、新鮮であふれ出てくる思い出が次々に整理されていき、短時間のうちにまとまっていく。「菊池のんびり農村生活体験」という百科事典を創った2時間でした。

また、これから数回にわたってお届けするQUESTは、Q講座の一つの柱である「キャリア教育」として位置づけ、様々な分野で研究を行い追究することを仕事にした人を迎えて授業を行っていきます。

講師の紹介

津曲隆先生

熊本県立大学総合管理学部は、行政・経営・情報・地域福祉の4つのコースに分かれています。その中の情報管理コース（情報）に所属されており、情報学を専門とされています。



メディアの役割とそれを活用したまちづくりの手法などを研究されています。特に、地域社会におけるメディア（地域メディア）を対象にしているそうです。デジタル機器を活用して地域を様々なメディアによって表現していくプロジェクト「Produce X」など、詳しくは研究室のHP(<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~produce-x/index.html>)をご覧ください。

また、今回のワークショップを電子ブックにまとめていただいています。是非、もう一度見返して見てください。

「タイケンをコトバにしてまとめよう」ワークショップ電子ブック URL:

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~tumagari/workshop/utojh2010/>

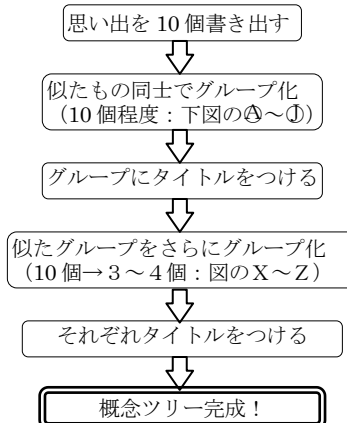
タイケンをコトバにする

今回の学習は、10人ずつのグループで学習を進めました。それぞれのグループに、「ファシリテータ」の学生さんが一人ずつ入り、学習のサポートをしてくださいました。

※ファシリテーション(英: facilitation):

ファシリテーションとは、会議等の場で発言や参加を促したり、話の流れを整理したり、参加者の認識の一致を確認したりする行為を指します。また、ファシリテータとは、その行為を行う者のことをいいます。

授業の流れ



左のフローチャートのような流れで授業は進められました。各グループにタイトルをつける時には、さらに説明を加えました。このグループに分ける作業がなかなか大変です。まとめた項目を包括するコトバを探すのが大変なのです。

キーワードは『キーワード』

この作業の困難さは、菊池のんびり農村生活体験を特集したQUESTは、伝えたいことが多すぎて3号に渡ってお届けしたことから推測してください。『簡潔にまとめること』の難しさは、子どもたちも十分に感じたようです。

最初の付箋は各班で100枚になります。「似たもの」でまとめてキーワードで表してみると、はみ出すものが出てくるのです。すべてのものが収まるキーワード探しは、行き詰まるとそこから抜け出せません。抜け出すために必要なことは、「視点を変えること」です。

菊池のんびり農村生活体験

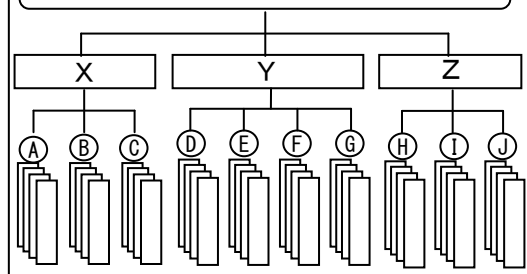


図 概念ツリー

「これとこれは似てる」と思っているけど「どこが似てるの?と考えると自分に驚いた。共通項目を分けていくのに、キーワードが思い浮かばず困ったが、高橋君や中山君がまとめた言葉を言ってくれて驚いた。よく考えてみると、その言葉に共通点があった。似た項目も多く、みんな同じようなことを感じたのかと思ったが、少しずつ注目している場所が違うこともおもしろかった。(2組安部友里菜さん・抜粋)

あるひらめきが行き詰まった事態を打開することは、科学の分野でもよくあることであり、大きな前進への原動力となるものです。

知識には距離がある

そして『概念ツリー』ができあがりました。表面の図をご覧ください。これは、単に体験を分類したものではありません。例えば④と③と①を比較してみます。④と③はXという共通項目でくくられます。①は別項目Yに含まれますが、Yの中では比較的Xに近い。また、④と③は同じXという項目の中にありますが、③のほうが④より①に近いわけです。

このように項目間には距離が生じるわけです。しかも、この距離感はどうな視点で整理するかによって大きく違いが出てくるのです。一人10項目ずつ出し合った時点では100枚の付箋は班ごとにあまり大きな違いはなかったでしょう。しかし、X、Y、Zの時点では、ある班は「Enjoy・Study・People」に分け、ある班は「自然のもの・生活に必要なこと・その他の必要なもの」に分けています。視点が変われば項目の距離感が変わります。これは新しい学問ができることと同じです。『菊池のんびり農村生活体験学』という学問ができ、そしてそれを体系的にまとめた百科事典ができたのです。

分類は新しい発見・創造の原動力

ロシアの化学者メンデレーエフは、それまで発見されていた元素を並べると、周期的に性質を同じくしたものが現れ、グループ分けできることを発見しました。そして、当時発見されていない元素の存在を予言し、彼の死後、まさに予言したとおりの元素が発見されました。

体験したこと、経験したことを言葉にしてまとめることはとても大切なことです。体験を言葉にすることで漠然とした記憶を整理整頓していくことができます。そして、この営みは、人文・社会・自然を問わず科学の基本なのです。我々人類は、これまで様々な経験を知識として集約してきました。集約した知識を整理して、自然界に存在しない新しいものを創造してきました。新しいものを創造するためには、過去の歴史や経験を学ばなければならないという津曲先生の言葉はとても重みのある、深い言葉でした。宇土中を卒業し、想像力豊かな人材として社会で活躍してくれることでしょ。生徒たちの感想を読み、そのようなことを感じました。

生徒たちの声

僕は今日の授業で、体験や物事を分類して整理するだけで、新しい考えや共通点などが見えてくるのがわかりました。また、分類することが新たな人工物をつくる上でとても大事だということに驚きました。こうして考えてみると、人が使っている道具のほとんどが分類をヒントにしてつくり出されているのではないかと思います。これらのことから、



「分類すること」は、僕たち人間が栄えていく上でとても大事だと思いました。ぼくもこれから分類することによって新しいことを見つけていければいいと思います。



(1組 関 良朝くん)

(1組 関 良朝くん)

今回は熊本県立大学の先生と学生の方が来られて、体験を言葉にしてまとめました。体験したことを言葉にすると新しい発見が出てくるということでした。実際に菊池での体験を概念ツリーにして言葉で表すと、「こんなことがあったんだ!」という発見がありました。そしてツリーを見ることで、菊池でやったことが一目でわかるようになりました。今日まとめたことを生かして他の人に菊池の体験を伝えることができたらいいなと思いました。



(1組 早川 理夏子さん)

今回のQ講座では、「菊池のんびり農村生活体験」を言葉にしてまとめることで、菊池のことを振り返ることができました。ファシリテータの森さんに教えていただきながらツリーをつくることができました。体験を整理すると新しい発見をすることができることもわかりました。これからは何か体験した後は、言葉にして整理してみたいと思いました。

(2組 甲斐 絵理奈さん)

今回のQ講座では、熊本県立大学の先生と学生の方に来ていただきました。ファシリテータの松尾さんには、概念ツリーなどをつくるのを手伝っていただきました。私が心に残ったことは、星座観察などで、まずそれを付箋に書きだし、どんどん概念を絞って考えていきました。それをすることで、大きく分けてどんなことがみんなの心に残ったのかがよくわかりました。津曲先生のお話はとても興味深いものでした。

(2組 吉窪 理々さん)

質実剛健

『科学する心を育てる』

第19回目のQ講座は、熊本大学大学院自然科学研究科教授、國武雅司先生と國武研究室に所属する大学院生および同大学工学部4年生の学生さんたちを講師に招き、「科学する心を育てる」授業をしていただきました。

「分子」や「原子」というのは、あまりにも小さく、肉眼で見えるものではありません。そのためその理解には抽象的概念で思考する必要があります。私たちの周りにはあるものは、すべて分子や原子からできた物質です。これを中学1年生が理解できるように國武先生をはじめ学生さんたちも趣向を凝らし、抽象的なものを具体化して説明してくださいました。身の回りにはあるもの（具体的なもの）を一般化（抽象化）する作業、または抽象的な法則から具体的な新しいものを創りだしていくという科学の営みを経験的に学ぶ授業となりました。

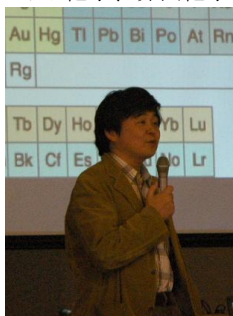
講師の紹介

國武雅司先生

熊本大学工学部を卒業後、九州大学工学部大学院で学位を取得。長崎大学工学部応用化学科助手を経て、現在は熊本大学大学院自然科学研究科複合新領域科学専攻の教授をなさっています。

分子の構造と性質、コロイド化学、界面化学、電気化学、高分子材料など多岐にわたる研究を精力的に続けておられます。

昨年も1年生を対象にQ講座の講義を受け持っていたほか、今年度は2年生のインターンシップも受け入れてくださり、本校の教育活動にも熱心に協力いただいています。



すべての物質は分子・原子から

私たちの身の回りにはあるすべての物質は、化学物質です。すべてのものは、何らかの分子・原子からできています。分子や原子の世界を理解するという事は、私たちの身の回りのことを理解するという事にほかなりません。そして、身の回りのことを理解し、応用していくことで、新たな発見や新しい素材の開発など、大きく世界が広がっていくのです。

グラニュー糖と氷砂糖を比べたとき、どちらのほうが水に溶けやすいでしょうか。もちろん、グラニュー糖のほうが早く溶けるのは言うまでもありません。どちらも「ショ糖」という分子からできています。では、違いは何かというと、粒の大きさです。なぜ粒が小さいほうが早く溶けるかということ、同じ量を溶かそうとすると、粒が小さいほうが体積に対する表面積が大きいのです。つまり、水と接する分子の数が多くなるということです。そのため、水に早く溶けるということにつ

ながります。粒の大きさということだけで、このように性質に違いが出てくるわけです。最近、「ナノテクノロジー」という言葉をよく耳にしますが、粒を小さくするという事は、既存の物質から新たな性質を見出せる可能性が広がるということなのです。

話を元に戻しましょう。グラニュー糖であれ、氷砂糖であれ、水に溶けるためには、水と出会わなければならないということです。これは、化学反応でも同じことが言えます。化学反応するためには、反応する分子や原子が出会わなければならないのです。濃度を高くすれば反応は激しくなり、濃度を低くすれば穏やかになるのはこのためです。出会うか出合わないか、これはつまり「確率」なのです。

具体化し、体験する。

國武研究室の学生さんたちが準備してくださったのは、分子を作る体験でした。

私たちが物事を理解するとき、一番わかりやすいのは実物を見ながら自分の手で触ること。もちろん、分子や原子はそれには小さすぎるので、コンピュータ上で分子や原子のモデルを触らせてもらいました。現代の子どもたちにとって、コンピュータ上のモデルを操作するというのは、実物を操作するのと大差がなかったのかもしれない。すぐに理解し、分子モデルを作っていました。ルールは、水素には反応の手が1本、酸素は2本、炭素は4本。このように説明すると、水は水素原子2個と酸素原子1個、二酸化炭素は、炭素原子1個と酸素原子2個、このくらいのものは、あっという間に分子モデルをつくっていききました。そして、エタノール

(C_2H_5OH) や、酢酸(CH_3COOH)なども、ルールさえわかればモデルを作ることができました。



油脂分子役の松原先生を界面活性剤役の生徒が囲む

化学反応。これも体験すればとてもわかりやすくなります。実験室で試験管を振るのではなく、自分たちが分子や原子になるのです。前述のとおり、化学反応の速度は、出会いの確率です。ある枠の中に、2種類の原子（2グループに分かれた生徒）を入れます。原子（生徒）は枠の中で自由に運動をするのですが、あるところで偶然2種類の原子どうしが出会うと反応し、新しい別の物質に化学変化します。次に、同じ量の原子（同じ人数の生徒）を小さな枠の中に入れます。そうすると、当然、偶然出会う可能性が高くなり（濃度が高くなり）、化学反応は早く進むというわけです。しかし、実際にはモデルとなった原子（生徒）は普通の原子にはない「思春期特有の特性」により、特に、男子と女子の間でなかなか「化学反応」が進まないこともありましたが・・・。

このほかにも、高分子化合物の重合や界面活性剤が汚れを落とす作用なども実際に生徒たち自身が分子となって分子の振る舞いを理解していました。

ややもすると、理科は暗記科目となって、化学式や科学反応式を覚えることで、理解したような気持ちになってしまいます。しかし、大切なことは、目に見えない分子や原子がどのように振る舞うのか、そしてどんな性質を示すのかということです。そこに規則性や法則を見出していくことに興味を持ち面白さを感じてほしいと思います。

昨年は、二人の日本人化学者がノーベル賞を受賞し、日本中が沸きました。ここ数年、日本人のノーベル賞受賞が相次いでいます。これは、日本の研究レベルの高さを示しています。資源が少ない日本には高い技術力があります。この世界に誇る技術力こそ、日本の21世紀を支える力になるはずですが。これまでのような環境負荷の高い開発をしては、いくら資源があっても、開発を持続することは不可能です。省エネルギーと環境調和は、21世紀の早いうちに私たちが取り組むべき課題であり、化学の分野はそれらを根本的に解決する切り札となりうるものとして期待されています。そのような意味も含めて国武先生は「化学はあらゆる分野を支えます」とおっしゃったのではないのでしょうか。

生徒たちの声

今日のQ講座では、原子と分子について学習しました。僕がこの授業で一番すごいと思ったことは、原子の大きさです。そのサイズはなんと、 0.0000000003m というとても小さいものだということがわかりすごいと思いました。また人間の体をはじめ、すべての物質が分子や原子からできていることを知り、とてもおもしろく感じました。機会があれば、熊本大学工学部にも行ってみたいと思います。今回習ったことをしっかりと頭に刻みたいと思います。わざわざ僕たちのために来てくださった先生方、ありがとうございました。

(1組 石田 純也くん)

今日の授業は、「科学する心を育てる」ということで、大学生や先生からとても興味深い話を聞くことができました。とても難しかったけれど、とても楽しく学びました。これから、科学をがんばって、いろいろなことを探究したいです。原子や分子など難しいものもあったけれど、とても勉強になりました。

(2組 西田 健誠くん)

今日は私の関心のある化学のことについて学びました。メモの欄では足りず裏にもたくさんメモを取りました。途中で楽しいゲームもあり、楽しんで学ぶことができました。今日のことで化学をもっと調べてみたいと思いました。元素記号などにも興味を持ちました。また科学を学んでそれをいかすことのできる仕事も調べてみたいと思いました。すべてのものは分子や原子からできているということがわかってよかったです。

(2組 八十田 玲奈さん)

私は理数系が苦手なので大丈夫かなと心配していましたが、パワーポイントや解説がたくさんあり楽しく授業を受けることができました。今日、初めて学んだことは原子の結合の「手」の数がそれぞれ違うことです。原子の種類は違っても「手」の数まで違うということにびっくりしました。ダイヤモンド、炭、鉛筆の芯は、見た目はまったく違うのに、すべて同じ「炭素」からできているということに驚きました。科学は難しいけどおもしろいなと思いました。

(1組 本田 鈴奈さん)

今回のQ講座では、熊本大学の方に来ていただき、科学について学びました。すべてのものは原子と分子からできていることなど、たくさんのおもしろいことを知りました。私たちも原子や分子からできていると思うと、とてもおもしろくなってきました。物質の性質を自分たちで表現するゲームはとっても楽しかったです！私は、油と水を仲直りさせるために洗剤を入れるといいということを知りました。実際にやってみようと思いました。でも、水と油の仲が悪いことを利用して作られたおもちゃもあるから、そういうことを利用して商品化するのはすごいなあと思いました。

(2組 内山 琴絵さん)



次々につながって「高分子ポリマー」になる

馬門石の旅、古代船の旅

およそ9万年前に爆発した阿蘇山の火砕流が冷え固まってできた凝灰岩のうち、網津町馬門付近に産出するものを馬門石と呼びます。この石は、ピンク色をしている大変珍しいものですが、江戸時代に熊本平野周辺で橋や水門、鳥居、祠などに使われました。さらにそれより千年以上前の古墳時代、5世紀から7世紀の近畿地方の古墳から、馬門石が出土しています。6世紀後半の推古女帝とその子竹田皇子が合葬された植山古墳（奈良県橿原市）からは、馬門石製の完全な石棺が見つかっており、また、聖徳太子ゆかりの大阪市四天王寺南大門正面に馬門石の「礼拝石」が置かれています。

電車もトラックもない時代、どのようにして馬門石は近畿地方まで運ばれたのでしょうか。2005年、その再現実験が行われました。およそ6.7トンの復元された石棺と、当時の古代船も復元し、宇土マリナを向出した手漕ぎの古代船によって大阪南港を目指しました。およそ1か月の船旅の末、宇土から近畿地方まで当時の船で運ぶことができることを実証したのでした。

このプロジェクトに参加したときの思いなども熱く語っていただきました。この実験のスケールの大きさと、藤本氏の熱い思いは生徒たちの心にもしっかり届いたようで、多くの生徒の感想に、この実験のことが書かれていました。

生徒たちの声

今まで考古学というものは難しそうで、自分の身近なものではなさそうだと思っていましたが、今回学習してみて、考古学は昔のことを調べていく学問であり、昔に作られたものの跡などは自分の近くにもとてもたくさんあふれていることがわかりました。警察の現場検証と同じように、モノから調べていけるというところがすごいと思いました。時代が変わるごとにモノの形も少しずつ変わっているということも鉄道の旅客車両の例をスクリーンで見てよくわかりました。そのほか、船を作り検証するなど、考古学は身近なところで行われていることを学びました。今回のこと以外に、自分でもっと調べてみたいと思いました。（1組 高木 悠成くん）

今回のQ講座は知らないことをたくさん知ることができ、面白かったです。私は宇土出身じゃないから、まだ宇土のことをよく知りません。でも今日の授業で少し「考古学」や宇土の面白いところや知らなかったところを知ることができたと思います。今日の授業でたくさん知ったことがあります、それでもまだほんの少しだと思います。もっともっと教えてもらい、知りたいなと思いました。

（2組 藤原 りくさん）

今日は、考古学と宇土の歴史について深く学ぶことができました。考古学は、教科書にも載っていないので、すごく興味がありました。考古学は過去の人類の物質的遺物から、人類の過去を研究する学問で「モノ」から「コト」を明らかにできるものということでした。昔の書物に実際に書いてあるものからではなく、遺跡から出土した骨などでどんな人なのかがわかる学問でもあることがわかりました。そして、映像で見せていただいた馬門石の石棺を運ぶところはすごいなと思いました、運んだことでまた新たな歴史が紐解かれたことがすごいと思いました。やっぱり歴史は深くて難しいと改めて感じました。私は松橋に住んでいるけど、宇土の歴史もこれからたくさん学びたいです。藤本さん、ありがとうございました。

（2組 塩村 若菜さん）

今回宇土の歴史についていろいろ学ぶことができました。私は中学校に入ってから初めて宇土の歴史について学んだので、少々驚きもあり、たくさんのことを知れてよかったです。また、小西行長が関が原の戦いでもし勝っていたら、今熊本市にある繁華街が宇土にあったかもしれないというのを聞いて、大変驚きました。このことで、歴史は本当にすごいと感じることが改めてできました。馬門石については、本当に不思議に思いました。いくらなんでも6.7トンは無理があるだろうと思っていたら、本当に大阪まで運べたなんて、本当にすごいと思いました。昔の人は休息するところや食料をもらうところもなかったのにどうやってそこまで行ったのかと思うと、やはり不思議で仕方がないと思いました。

（1組 平居 由風さん）

今日は考古学の勉強をしました。考古学という言葉は、あまりピンと来なかったのですが、藤本さんの授業を聞いているうちにとても楽しくなってきました。私は歴史が大好きなので、藤本さんの授業はとても興味深いものでした。特に向野田古墳の話はとても好きです。私の家の近所に古墳があって、よく遊びに行ったことがあるので、歴史に隠されたミステリーがあるなんて思ったこともありませんでした。今度行くときには歴史的な目で古墳を見ていきたいと思いました。

（1組 戸北 聖美さん）



質実剛健

コミュニケーションは何のために必要か？

コミュニケーション、英語では communication。英和辞典をめくると、いくつか意味が載っていますが、結局は『伝え合うこと』だと思います。「伝える」という一方通行でなく、両方が発し、受け止めることで、分かり合え、協力し合うことができるようになってくるのではないのでしょうか？新聞記者という仕事は、取材においては一見聞き取り専門のようなイメージがありますが、実はそうではないということが今回の講話で分かりました。

新聞記者の仕事

1月30日は、熊本日日新聞社宇土支局支局長 後藤幸樹さんをお迎えして、「新聞記者の仕事」の内容で御講話いただきました。

後藤さんは宇土支局の前は編集局の運動部におられ、ロアッソ熊本など地元のスポーツについて取材したり、記事を書いたりしておられたということでした。



編集局には7つの部（社会、政経、文化、暮らし情報、写真、運動、地方）と支社・総支局があるということでした。これらから原稿や写真が集まり、編集本部が見出しを考え、新聞となっていくということでした。

取材では、政経部はスーツを着ていくが、運動部はラフな服装で行く、というお話もあり、それぞれの部で状況や相手に合わせて取材されることが分かりました。

新聞記者の7つ道具も紹介してくださいました。

3色ペン、ノート、一眼レフカメラ、パソコン、レコーダー、名札・腕章、脚立

です。

ただし、レコーダーは基本的には使わないということでした。それは、頼ると聞かなくなってしまうからという理由でした。写真は連射で撮り、1つの写真を得るためには100枚ほど写すことも分かりました。その中からのベストショットを選ぶ作業もきっと大変なことでしょう。

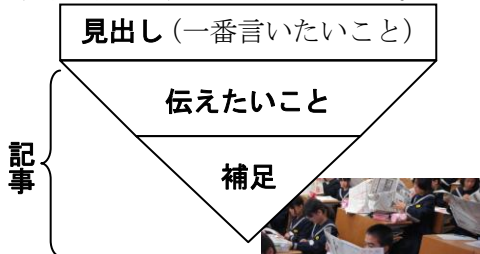
新聞記者は資格は要らない。しかし、『人間関係がとても大切』で、『真実』を『正確に』伝えるためには自分一人では限界があるため、『分かるまで聞く』ことが必要であり、人との出会いを大切にしなければならぬ、というお話がありました。また、相手とのやり取りの中で得るものがたくさんあるとおっしゃいました。



新聞ができ得るまで

新聞についてもお話がありました。原稿の締め切りは21:00~24:00で、「1面とテレビ欄の裏」が一番遅くなる、ということでした。そこは、新聞を見れば分かりますが、一番大きな記事を掲載する場所で、事件などが起きたら差し替えなければいけなくなるからでした。ローカルワイド（地方の記事）はそこまでの緊急性がないので、21:00~22:00には締め切るそうです。

記事の構成についても説明がありました。簡単に言うと、『逆三角形』だそうです。まず見出しが「一番言いたいこと」を表し、次にまず伝えたいことを先に書き、その後内容に関する補足を書くということでした。



1日35万部発行されるそうで、朝刊1日分で「小説2冊分」くらいの量になるとのことでした。たくさんの人たちからの情報を、いろんな部の記者や編集者の方たちが記事や写真にし、たくさんの人たちに伝えようとしていることがよく分かりました。

今回、このようなお話を聞くことができたことで、また新聞の読み方も変わってくるのではないのでしょうか。

Q&A

最後に質問も受け付けてくださいました。

- Q: 紙はどうして灰色なんですか？
→古紙を再利用しているからです。
Q: 写真の色つきや白黒の違いは何ですか？
→新聞の面ごとに、会議で決まります。
Q: お休みはどれくらいあるんですか？
→月4日くらいです。でも、事件や依頼があれば休めません。

生徒の感想

一番最初に聞かれた服装のことで、私は、「クリーム色のスーツのズボンで、こげ茶っぽいベルトで、青や白のTシャツで入れパン、四角のメガネのウサウサの髪の毛」というイメージでした。でも、その後に、部によって服装が違うって言われて、とても驚きました。質問で「カラーと白黒をどうやって決めるのか？」って聞いたら、執行会議で決めていることが分かりました。前までは、大事なところとそこまで大事でないところで決めていると思っていたけど、解決して良かったです。(田上 梨々花)



お礼の言葉も梨々花さんが言ってくれました。

今回のQ講座で、新聞記者はとてもやりがいがあると思いました。今度記者の仕事を経験できたいと思います。私のおじいちゃんが熊日で働いていたらしいのでいろいろな話を聞いて、記者の仕事について知りたいと思いました。(八十田 玲奈)

今日は、新聞記者のことにについて勉強しました。私は前から、編集とかするのに興味を持っていたので、今回の講話はとてもワクワクしました。また、初めて知ったことがたくさんあります。一つ目は、部によって、取材するのが違うこと。二つ目は、服装が違うこと、などです。あとは、レコーダーをあまり使わないことにもびっくりしました。もし、私がどれかの部に入るなら、後藤さんと同じように、運動部がいいなあと思いました。(改働 愛)

私の記者さんのイメージは、カメラをいつも持っていて、ひたすらメモっているというイメージでしたが、紙面ごとに締め切りが違うことや、毎日パソコンを開いていることなど、驚くことがたくさんありました。私は、新聞がどのように作られているのかに興味があって、記者さんがインタビューの質問も詳しく考えて、相手にとても気を遣われていることが分かりました。

題名や見出しで読むか読まないか決まると思うので、工夫していることは、なるほど、と思うことがたくさんありました。私は本を読むのが好きですが、新聞はあまり読まないで、機会を作りたいと思います。(荒木 美里)

今まで、新聞記者は、事件などを取材しているだけかと思っていたら、実際は警察からの情報を使って記事を書いたり、初めて知ったことがいろいろありました。また、人とたくさんコミュニケーションをとることで、情報などが入りやすくなっ



たり、教えてもらったりするんだと思いました。新聞を作る仕事はとても大変そうだけど、とても楽しそうだなと思いま

した。(河野 寛大)

探究レポート作成中

「Quest I」の発行が遅れておりまして、なかなかタイムリーなお知らせができていませんが、現在のQ講座の活動や予定をお知らせしたいと思います。

今、生徒たちは、これまでQ講座で学んできた内容から、好きなテーマを選び、その内容を更に自分で調べ深める(探究する)という作業をしています。取りかかり自体は1月中旬に始めましたが、なかなか作業が進んでいない生徒も多かったようです。そして、先日25日(金)に、また進めました。3月1日(火)には、班とクラスで発表会を行います。各クラスの代表3名ずつ(予定)は3月11日(金)の学年発表会へと進みます。

発表テーマも様々ですが、一番多いのは「和菓子」でした。各クラス10名前後います。同じテーマの場合、どこで差を付けてくるのか、楽しみです。

また、発表方法も応用紙やパソコンでのプレゼンテーションを予定している生徒も多く、充実した発表会になる予感がするところです。

今後のQ講座の予定

3月 1日(火)	班・クラス発表会
3月 11日(金)	学年発表会
3月 18日(金)	クッキングクラスマッチ

今、求められる力

2月25日(金)のQ講座の最初に、田代先生が来られました。先生から直接お話しを聞いたのは6月以来で、主な内容は「阿蘇自己再発見キャンプ」についてでした。

2年生の5月25日(水)~27日(金)に行われる予定で、その内容を簡単に説明していただきました。詳しくは後日改めて掲載したいと思います。

この話の冒頭で、熊本大学工学部の國武先生(原子・分子の講話をしていただいた先生)とのお話の内容でした。今、学生は就職難の時代で、企業はどんな人を採用しているか、という話でした。問題解決能力やコミュニケーション能力を身に付けている人を求めている、とのことでした。まさに、Q講座のコンセプトを思わせるようなお話でした。生徒たちが就職の時期を迎える時、このQ講座での学びが生きてくるのかもしれない。とにかく「いろんな人と接する」ことで、自然とそのような力が身に付いてくるということでした。

質実剛健

「言葉の力 伝える力」

「お互いを知る」、「真実を知る」という上で、人間社会においては『言葉(言語)』というものは非常に重要な役割を果たします。それをコミュニケーションという言葉で表したりしますが、「知る」ためにはもちろん、「知らせる(伝える)」ためにも、とても大切です。その使い方を正しく使おう、というお話でした。また、福島さんは、御自身の、コミュニケーションを通して得た貴重なものを我々に惜しみなく伝えてくださいました。

講師紹介

12月3日の講師はRKK報道制作局放送部次長の福島絵美さんでした。RKKのアナウンサーとして、テレビやラジオで御活躍なのでみなさんよく知っていることと思います。

福島さんは静岡県三島市生まれで、高校2年の時に熊本高校へ編入され、その後小学校の教師を目指し、熊本大学教育学部に入学されました。その大学在学中に転機が訪れました。それは、2年生の時にミス熊本に選ばれ、いろんなPR活動に参加し、「伝える」ことの楽しさ、おもしろさに出会われました。それからは、2年間必死に勉強され、360人中2人という狭き門を見事突破され、晴れてRKKのアナウンサーとされました。

1993年から1年半、アメリカのシアトルとモントナでニュースリポーターも務められました。帰国後は、「週刊山崎くん」の初代キャスターとなり、育児休暇後は7年間夕方ニュースでの、女性初のメインキャスターを務められました。現在は、放送部次長として、アナウンサーの教育・指導にあたり、ニュースや大学の放送講座、経済番組などを担当されています。

また、ラジオでは、「お話玉手箱」という朗読番組で、系列局のアナウンサーが腕を競う『アノンシスト賞・全国優秀賞』を2009年、2010年と2年連続で受賞されました。

その他、男女共同参画社会推進懇話会委員として、熊本県の「男女共同参画社会基本計画」策定と「推進条例」の制定に携われ、県よろこそくまもと観光審議会委員、県九州新幹線くまもとづくり応援隊など多岐にわたり、御活躍をされています。

言葉や話すことに関する講師や家庭と仕事の両立をテーマにした講演活動にも力を入れておられます。

このような素晴らしい実績を持たれている著名人をお迎えし、貴重なお話を聞く機会を持つことができましたが、それに相応しい中身の濃い御講話をいただくことができました。

このように素晴らしい実績を持たれている著名人をお迎えし、貴重なお話を聞く機会を持つことができましたが、それに相応しい中身の濃い御講話をいただくことができました。



多くの出会いで学んだこと

最初は小学校の教師を目指していらっしゃいましたが、夢がアナウンサーとなり、それに向けてがむしゃらに勉強をされたとのことでしたが、英語も勉強を続けておられたというお話でした。「いつか海外で仕事をしたい」という気持ちがあり、お仕事と両立させながら英会話を続けておられました。その「夢」を御主人にも日頃から伝えていたため、アメリカでの仕事の話の時も、早く送り出していただけたとのことでした。そこで、「身近な人に夢を伝えておくのもいい」と実感されました。

ただ、アメリカでの生活はいいことばかりではなく、アジア人差別にも出会われたり、銃の問題に心を痛められたりしたこともあったそうです。最初は、『違う』ことが目に付いたのが、だんだん『人は皆同じ』と感じるようになったそうです。

日本に帰国して、熊本家庭裁判所委員会の委員となり少年院にいる少年たちに出会ったときは、「少年たちの共通点は“コミュニケーション”が苦手なこと」と感じ、これが基でトラブルや事件につながったのだろうとのことでした。

男女共同参画社会づくりに携わる中、気付かれたことは、50歳代の男性の自殺の多さでした。「男は・・・」となかなか自分の弱さをさらけ出すことができない世代であり、妻にも言わないまま自殺するパターンが多いということでした。

これらの例を通して、「コミュニケーションの大切さ」を訴えてくださいました。

言葉のプロになろう

福島さんは、いつも3つのものを持ち歩いていらっしゃるとのことでした。「アクセント辞典」、「電子辞書」、「ストップウォッチ」です。日頃から、気になったら確認したり、練習したりされるということで、『プロの魂』を見せていただきました。

いくつか例を出して、正しい日本語について考えさせてくださいました。

生徒の感想

「日本銀行」の正式な読み方は「ニッポンギンコウ」、「一段落」は「イチダンラク」、「他人事」は「ヒトゴト」。他に、「元日」と「元旦」の違いや「山都町」は「山都チョウ」で「美里町」は「美里マチ」であることなど。

発声は、お腹にたくさん息を吸う腹式呼吸で、姿勢をよく、口の形をはっきりさせながら大きな声で言うことが大切とのことでした。口の形をはっきりさせる練習も準備していただいた用紙を使って演習しました。



「私は今日熊本で買ったスイカを食べました」という例文では、区切り方で二通りの意味になることも教えてくださいました。

正しく伝えるためには、正しい日本語を使うことが大切であることを学びました。

朗読についても、実演を交え説明してくださいました。最初は教科書を使って、次に夏目漱石の『坊ちゃん』の坊ちゃんとお婆あちゃんのやり取りの部分を使って。「坊ちゃん」では、戸北さん（坊ちゃん）と塩村さん（ナレーター）、福島さん（お婆あちゃん）で見事に情景を彷彿させてくれました。朗読の大切なことは、「情景描写」をすることが大



切なので、イラストを描いてみたりすることもいいとのことでした。また、「風は風っぽく、雲は雲っぽく」読む。朗読は決まりがないから、イメージを膨らませることが大切ということでした。

「今は二度と来ない」 「今を大切に生きる」

最後に、いくつかのメッセージを伝えられました。

まず「楽しいことばかりではない」です。福島さんも華やかな人生を歩んでいられているようで、いろんな苦勞もされてきていらっしやること。それを乗り越えてきていらっしやるからこそ、輝いていらっしやるのでしょう。

次に「好きな仕事は苦にならない」です。だからこそ、乗り越えてくることができたこともたくさんあるのではないのでしょうか。そのような仕事に巡り会いたいと思った生徒も多かったと思われます。

「思うだけでなく、努力をしてください。その努力を決して止めないで。」ということでした。『夢』がコンセプトの宇土中学校には、まさにこのことが一番大切なことなのではないのでしょうか。それを体験された方の言葉は重みがありました。

僕は、心に残ったことが2つあります。1つ目は、夢を持つことの大切さです。僕には、まだ夢がありません。しかし、今日の講話を聞き、夢を持つことの大切さが分かりました。なので、次からいろいろな活動に参加して、自分に合った夢を見つけたいです。2つ目は、今できることを一生懸命頑張ることの大切さです。僕は、今まで本気になって一生懸命頑張ったりすることをあまりやったことがありません。だから、これからは何にでも一生懸命頑張りたいです。今日は、とても良い経験ができたので良かったです。（西田 健誠）

今日の講話は、夢、言葉、出会いなどいろいろなお話をされて、その中でも私が心に持っておきたいなと思ったのは、「あきらめないこと」、「チャレンジすること」、「チャンスをつかむこと」です。私の将来の夢は保育士です。この夢は小学校くらいから持ち始めて、まだ7年しか経ってないです。でも、この夢に向かって、“あきらめない、チャレンジ、チャンスをつかむ”を心に持って、夢を叶えられるようにしたいと思います。その他にも、勉強とかいろんなことに当てはめて頑張ります。☺（藤原 りく）

今日はRKKから福島絵美さんが来られました。私もテレビで何度か見たことがありましたが、声がとてもきれいでびっくりしました。今日福島さんから教わったことは、夢についてと言葉についてでした。夢については、自分も将来の夢があるので、福島さんの話を聞いて良かったなあと思いました。そして、改めて夢をあきらめずに頑張ろうという気持ちになれました。言葉についても、アクセントの付け方や話し方など難しいことがたくさんあったけど、一緒に発声練習をしてみて、「楽しい」と感じることができました。私はこれからもっと語学の勉強や広い視野でものを見たりしながら、自分が一番やりたいと思う仕事を見つけていきたいなと思います。（早川 理夏子）

今日は、聖美ちゃんがすごいと思いました。夢がアナウンサーで、読むのがうまいと思っていたけど、本当に役に入りきっていたところがすごいなと思いました。福島さんの小さい頃からの夢が変わってしまったように私の夢も変わるかもしれませんが、福島さんが大事にしている言葉のように、「今は今しかない」ので、今できることを一生懸命やりたいな、やれるといいなと思いました。途中で、発声練習をしたりなど、とても楽しかったです。いろいろなことを学ぶことができたと思います。（山田 莉奈）





保護者の皆さんも、楽しく挑戦されました。

できるのであって、自分にはできるのかなあ」と思った生徒は少なくなかったことでしょう。三角ペラや串を駆使し、説明の通り作り出すと、だんだんみかんに見えてきました。そして、最後の工程である、『皮をむく』作業ではどきどきしながらめぐりました。うまいこときれいなみかんの房が見えているものもあれば、実(み)に傷がついてしまったものもありました。しかし、自分で手がけた作品はきつといとおしく感じたことでしょう。

生徒の感想

2つ目は「みかん」です。みかんはみかんでも、「皮をむいて中の果実が見えている」もので、それがとてもリアルに見える作品です。「あれは片岡さんが作るから



今日は、和菓子作りを体験することができました。最初お話をされた後に片岡さんが実際に作っていただきました。スプーンが曲がるのが

とってもおもしろかったです。次に自分たちも作りましたが、うまくいきませんでした。でも、とっても楽しい探Qの時間でした。(須藤 晶)

今日の講座を受けて、和菓子作りは技術がないと絶対にできないものだと思います。ただ普通に口に入れている和菓子ですが、改めて見ると本物の植物や動物みたいですすごいなあと思います。自分でも作って見たけど思っていた以上に難しかったです。片岡さんは、『自然に手で覚える』と言われたので驚きました。今日は、本当にいい体験ができました。(本多 沙羅々)

今日の和菓子作りで一番記憶に残ったことは、片岡さんが私たちの目の前で、パパッと和菓子を作ってくれたことです。自分で作ってみると、話しながらなんて全然できず、とても難しかったです。和菓子職人ってすごいなあと思いました。(夏目 愛)

和菓子作りは初めてでとても楽しかったです。講師の片岡さんはとてもおもしろくて、スプーン曲げがすごかったです。私たちは作ったのは、ききょうとみかんです。本物っぽくするのはとても難しく、変な形になってしまいました。でも、とても貴重な体験だったので、できてうれしかったです。(津川 礼奈)

初めての体験でした。とても楽しかったです。五感を使って楽しむ日本の和菓子文化はすごいと思いました。今日は、片岡さんの、全国トップレベルの技術とスプーン曲げが見れて良かったです。(田島 舞)

今日は和菓子作りと、片岡さんに講話をしていただきました。講話では、和菓子について、お店では今の季節より少し先の時期の華や鳥の和菓子がよく並んでいることを初めて知りました。今度お店に行ったら確かめてみたいです。次に、実際に和菓子を作りました。手本を見ていると、とても難しそうでしたが、作るのはおもしろくて、自分なりによくできたのでうれしかったです。楽しかったです。(境口 円香)

何にも考えずパクパク食べていた和菓子が、あんなに難しいなんて思いもしませんでした。少しでも水分が足りなかったら、手にひっつくし、早くしないと、ねりきりが堅くなってしまい、上手に作る事ができませんでした。片岡さんは、とても早く、やっぱり職人だなと思いました。(浦川 明日香)

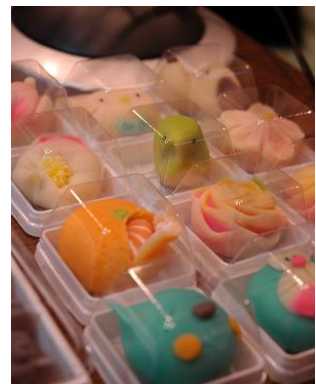


片岡さんは、実際に和菓子作りを見せていただいた時のように、手早く、しかも丁寧に作っているように

なるまでは、何度も繰り返し作り続けてきたからだと思いました。初めて自分で和菓子を作りましたが、思ったより難しく、うまくいかなかったところもありましたが、作り上げることはできました。見た目がとてもきれいで、日本の持つ素晴らしい文化なので、この先もずっと伝わり続けて行って欲しいと思いました。(高木 悠成)

今回は、講師の片岡さんから「和菓子作り」について教えてもらいました。日本の季節に合った色の材料を使って、和菓子を作るので、消費者も食べながら季節を感じることができるのでいいなあと思いました。実際に、ききょうとみかんを作ってみて、思ったよりうまくできました。みかんの皮など、包むときにひびが入ったりしたので、難しかったです。自分で作った和菓子もおいしかったです。

(小山 貴之)



質実剛健

『「まちづくり」という仕事』

第21回目のQ講座は、九州大学大学院人間環境学研究院から田北雅裕先生をお招きして『「まちづくり」というしごと』と題し、実施しました。『まちづくり』という言葉は、決して聞きなれない言葉ではありません。しかし、具体的にはどんなことなのでしょう。道路を作ったり橋を架けたり公園を整備したりすることだけで「まちづくり」はできません。なぜならそこに人が住まなければ「まち」としての意義がないからです。田北先生は「まちづくり」は「人々を幸せにすること」とおっしゃいました。これまでのQ講座とは少し違った視点からの講義となりました。生徒たちもこれまでと違った視点、つまり違う考え方を身につけた2時間でした。

講師の紹介

田北雅裕氏
熊本市出身。九州大学大学院人間環境学研究院専任講師。高校生の頃、自分の大切な場所だった白



川沿いの「橋の下」を作りたいという思いから大学では土木建築を専攻。九州芸術工科大学大学院に通う傍ら、デザイン活動「trivia」を開始。その後、研究で関わった「杖立温泉」にそのまま移り住み、『杖立ラボ』を設立し、まちづくりを行う。杖立温泉街の再生に精力的に取り組みながら、小国高校で総合的な学習の時間の講師を務めたり、九州国立博物館開館記念展等様々なウェブサイトの作成、音楽・アートプロジェクトの企画や「南阿蘇えほんのくに」の館長を務めるなどその活動は多岐にわたる。

「まちづくり」という仕事

「まちづくり」という言葉。「まち」を「つくる」こと…と、言えば簡単ですが、具体的にどのようなことなのか、それを仕事にするということはどういうことなのか。田北氏の場合、自分のやりたいことを追究していった結果、「まちづくり」をしていたようです。

はじめりは学生服の頃

自分だけの「お気に入りの場所」はありますか？田北氏はそれが「白川にかかる橋の下」だったそうです。中学や高校の頃、自分が落ち着く場所として、何かあると「橋の下」へ行ったそうです。そこは、あるときは一人で考え事をする場所だったり、またあるときは、気の合う仲間が自然と集まってくる場所でした。

そんな自分の居場所を見つけ、そのような場所を作る仕事をしたいと思うようになりました。しかし、大学受験、学部学科の選択、大学院への進学、さまざまなところで挫折を経験しました。しかし、どんなに失敗があったり、自分の選択が思っていたものと違っても、そのたびに新たな希望を持ってチャレンジしなおしていくのでした。

それは、「橋の下」のような空間をつくりたいという根源的な思いを持ち続けることができたからでしょう。そして、大学院の研究として杖立の温泉街再生と出会います。

杖立温泉

杖立温泉は、伝説によると応神天皇の産湯として使われたとされています。ですので、約1800年の歴史があることとなります。杖の助けを借りてやってきた人が、湯治により健康を取り戻し、帰るときには杖なしですむということからその名前がついたとされています。戦後は九州の奥座敷として栄えましたが、黒川温泉や湯布院が温泉街として集客に成功する一方、杖立温泉は衰退していきました。

田北氏は杖立温泉に移り住み、自分でかつて遊技場であったところを改装し、「杖立ラボ」を設立しました。そしてまちづくりに着手します。しかし、突然外部からやってきた学生が簡単にできることはありません。地域の人たちに信頼されるために徹底的に話し込みをしました。すると少しずつ住民からも信頼を得られるようになり、協力してくれる人が増えてきました。こんなエピソードを紹介してくれました。

杖立川にかかる橋に大きな花壇が設置してありました。かつてはそこに植物が植えられていたそうですが、その後使用されなくなり、通行の邪魔になっていたのです。しかし、その花壇には住民のたくさんの思いがこめられており、邪魔にはなっているものの、撤去するのは難しいと言われていました。しかし、田北氏は住民との話し込みを重ね、理解を得ることで撤去にこぎつきました。そして撤去の日には、設置した人も協力してくれたということでした。

この話の中で、田北氏は私たちに大切なこと

生徒たちの声

を教えてくださいました。それは、このような話し合いにおいて、一部の権力を持った人の声が大きくなってはいけないということです。それぞれの意見は、住民一人一人の意見として平等に扱われなければならないということです。このようなことは、町、市、教室、どんな規模のコミュニティであれ、絶対に守らなければならないことです。

このようにして、杖立温泉街は少しずつ変化してきました。数年前から時々雑誌などでも昭和のレトロ感が漂う温泉街として取り上げられたり、最近ではコンビニなどでも『杖立プリン』なども売られるようになりました。

大切なのはちっぽけな違和感

授業の冒頭で、「くらしの中に『違和感』を感じることはありませんか？」という質問がありました。「ん？なんか、おかしいな」と思うようなことです。

田北氏は、工学部で橋や道路をつくる土木系の学科に入学しました。そこで「違和感」を感じました。本当につくりたかったのは、そこにいて幸せを感じられるような『空間』だったのです。その思いを原点として、人が幸せを感じられるようすること、「違和感」を感じることを改善していくといった営みを続けていたことが「まちづくり」をしていくことになったのです。

私たちは、「違和感」を受け流すことになれてはいないでしょうか。「制度がよくないから」「社会がよくないから」という言葉で片付けてはいないでしょうか。そこに自分から働きかけ、変えていくことを続けていけば、暮らしやすい「まち」ができ、より自分らしい「くらし」ができるのではないのでしょうか。

最後に、子どもたちへ向けて、「当事者意識」をもった「まちの住民」になるための9つのコツとしてメッセージが送られました。

1. 好きなものではなく、ほうっておけないもの（違和感）を突き詰める。
2. 「つい伝わってしまうこと＝秘密」を見逃さない。
3. 相談者がいない人の相談に乗る。
4. 自分の役割じゃなくても、組織としてのやるべきことをやる。
5. 知識や美意識を無理に「理解」させようとしない。
6. 人を頼って感謝する。
7. 偶然（自然）を受け入れ、尊重する。
8. プロジェクトの時間ではなく、「生活の時間」で周りの人たちと接する。
9. 自分の思い出を振り返り自分と丁寧につきあう。

特に、6番目は、思春期を迎えた生徒たちへ向けて、周囲や親を頼ることも大切だということや、同時に感謝することの大切さを語っていただきました。

今日の授業で、生活の中の「違和感」や「気になること」を考えてグループで話し合っ解決方法をたくさん聞くことで、みんなもこんなことを思っているんだということがわかりました。宇土中ではQ講座などで話し合いの場をもうけることがあります。話し合いで意見を集め、結論を出すのはシンプルですが、大切だと感じました。他人と協調することでより高度な意見、方法、結論が生まれてくると思いました。

生活の中の違和感：涙が出ること、なぜ人は生き、死んでいくのか

1組 清田 京介くん

私たちのまちをつくるという事は、私たちが違和感を持ったり気になったりすることから、またその解決法を考えていくことから進めていくことができるということがわかりました。私は最初、まちづくりってどんなことなのかよくわかりませんでした。でも今日の授業でまちづくりはみんなで協力してやっていくものなのだという事もわかりとても勉強になりました。

生活の中の違和感：道路に街灯などがあまりないこと

1組 山本 帆乃佳さん

まちづくりのことについて考えることができた。初めて知ったことなどもたくさんあった。ほかにも田北さんが今までやってきたことなども知ることができた。僕は、田北さんは自分がしたいと思ったことに突き進んで行ってとてもすばらしいと思いました。今日はめったに聞けない「まちづくり」の講話を聴くことができたのでいい経験になりました。今日学んだことが、これからも生かしていけるといいなと思いました。

生活の中の違和感：母子手当てはあるが父子手当てはないこと

2組 中川 将真くん

今日は田北先生が「まちづくり」という仕事について講話をしてくださいました。私は最初、まちづくりと聞いて、何もイメージがわきませんでした。だけど、今日の話聞いて、どういうことか分かりました。杖立温泉を盛り上げるためにいろいろな活動をしていたので凄いなと思いました。レトロな雰囲気が出るといい感じにまち全体をしていて凄いなと思います。こういう仕事もいいなと思いました！！

生活の中の違和感：電灯が少ないこと、道がでこぼこしていること、感情を持つこと

2組 村上 歌蓮さん

質実剛健

職業講話『「学芸員」という仕事』

Q 講座は「地域学」「宿泊教室」「キャリア教育」の3本柱で構成されています。1年生の後半では、「キャリア教育」の一つとして、様々な分野を追究して仕事をされてきた方々をお招きして職業講話をしていただいています。1月28日のQ講座は、熊本市立博物館から学芸員の清水稔さんをお招きし、「学芸員という仕事」についてお話をいただきました。博物館には行ったことがあるけれど、「学芸員」という仕事は、実際にどのような仕事なのか、生徒たちはとても興味を持って講話を聞くことができました。

講師の紹介

熊本市立博物館学芸員 清水 稔 氏

大分市生まれ。愛媛大学魚類を専門に学び、京都大学大学院博士課程を修了。アフリカタンガニカ湖で淡水魚の研究を精力的に行う。1999年から熊本市博物館の学芸員として勤務。専門は主に動物行動学。



でされてきました。そして、小学5年生のときに釣りをきっかけにして魚類に深く興味を抱くようになりました。中学生の頃には親に「家業を継ぐ!」と言ったそうですが、断られるという経験もしたそうです。高校に入り、アフリカの魚を飼育されている生物の先生と出会い、さらに興味が深まっていきました。そして、淡水魚の研究をするために愛媛大学に入学します。大学院に進学し、憧れのアフリカのタンガニカ湖へ行き、魚類の研究なども熱心に行いました。帰国後、悩みに悩んだ末、京都大学大学院博士課程に進学することを決意します。そしてタンガニカ湖の魚類の研究を続けました。そこで考え抜いた末、「学芸員」になることを決意します。とはいえ、「学芸員」の募集などたくさんあるものではありません。清水氏は、西日本の博物館に20通を超える手書きの手紙を送りました。すると、熊本市からだけ返答がありました。そして1999年から熊本市の熊本市立博物館の学芸員として現在まで調査・研究から普及・啓発などの仕事まで幅広く活躍されています。

「学芸員」という仕事

「学芸員」とは、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業を行う「博物館法」に定められた、博物館におかれる専門的職員です。学芸員になるための資格は、1. 大学・短大で単位を履修することや、2. 文部科学省で行う資格認定試験に合格すればなることができます。なお、学芸員として活躍するには、博物館（登録博物館）で任用される必要があります（文部科学省ホームページより）。

また、博物館（はくぶつかん）とは、特定の分野に対して価値のある事物、学術資料、美術品等を購入・寄託・寄贈などの手段で収集、保存し、それらについて専属の職員（学芸員など）が研究すると同時に、来訪者に展示の形で開示している施設のことです。多くはある分野を中心に構成され、収集された資料に基づく研究成果を公刊すると同時に、来訪者がその分野について幅広く知識を吸収できるように工夫されています。

熊本博物館は、「地質」「生物」「理工」「考古」「歴史」「民俗」という総合博物館です。大きな博物館では生物の中でも「昆虫」、「鳥類」などと細分化されていることもありますが、熊本博物館では動物全般を清水氏一人で担当されています。

学芸員になるまで

清水氏は、物心ついたときからあらゆる動物に興味を持っていたそうです。そして、小学校低学年の時には「昆虫学者になるぞ!」という決心ま

研究は暮らしを豊かにする

「研究」というと、とても「堅い」イメージかもしれません。しかし、研究は、とても身近なところを出発点とします。清水氏は、水族館へ行って「あの魚、おいしそう!」と言うのは、「健全なこと」といいます。それは、自分のこれまでの経験と目の前の魚を比較しているからです。身の周りのものを比較し、分類・整理していくことが研究へとつながっていきます。そして、似たものの中に、同じものと違うものという観点で整理していけば、様々なことが分かってきます。そのためには、「観察力」が必要になってきます。

清水氏から、生徒たちに「ひれに注意しながら魚の絵を描いてみよう」

という日頃の『観察力』を問う課題が出されました。多くの生徒は左側に頭、右側に尾びれという絵を描きましたが、頭部を正面から描いたり、様々な視点から描いた魚図鑑ができました。



比較・分類により、新しい知見が整理されていくと、これまででない新しいものを作っていくことができます。身近なところに目を向けることが研究のはじまりです。ちょっとした違いに「意味」があるのかも知れませんが、世の中には分かっていることの方が多いためです。

無駄なことなんてない

ウサギの頭蓋骨と齧歯類（ネズミの仲間）の頭蓋骨の違い、グッピーとカダヤシのひれの付き方の違い、熊本で見つかった外来生物（アリゲーターガー、タランチュラなど）の実態、捨てられた北アメリカ原産のミシシッピアカミミガメ（出店などで売られているミドリガメ）の甲羅から分かること、競争的排除論（同じような生活様式の生物同士は競争しあい、排除しあう）を覆すアフリカ、タンガニイカ湖の4種類の魚など、生徒にとっての様々な「興味のもと」になるようなお話をしてくださりました。

職業講話をしてくださる方々が共通して言われることがあります。そのことを清水氏も語ってくださいました。それは、「何事も真剣に取り組む」ということです。清水氏の場合は、身近な質問を深めていくことの大切さを語ってくださいました。小さな頃からの動物好きという情熱が、今の仕事につながっているのです。「好きこそもの上手なれ」という言葉、まさにそのとおりです。この言葉に多くの生徒たちが勇気づけられたようでした。

生徒たちの声

今日は、学芸員の清水さんの講話を聞きました。「学芸員」という仕事は聞いたことはあっても、内容は全然知りませんでした。今日の講話を聞いて、学芸員ってとても大変な仕事なのだなと思いました。

私は虫などは苦手ですが、好きなことにすごく長く携われるっていいなあと思いました。私も清水さんのように、自分の好きな仕事に就けたらいいなあと思いました。

1組 改働 愛 さん

私は今日の Q 講座を受けて、初めて「学芸員」という仕事を知りました。昆虫や魚類の知識はほとんどありませんでした。だから、講話を聞いていて昆虫の動きを見れば、環境の変化が分かることや、卵をなぜたくさん産む必要があるのかなどの理由を聞いたときに「あ、そうなんだ」とか、「なるほど」というふうにとっても納得しました。何気ない発想を追究して博士号を取得したり、賞を取ったりすることができることもすごいと思いました。

1組 本田 鈴奈 さん

私は学芸員という職業を聞いたことはありませんでしたが、それがどのような仕事なのかは全く知らなかったもので、清水さんのお話で知ることができました。また、身近なものに目を向けて「なぜ？」と考えることが研究のはじまりとなり、私たちの生活をより豊かにするものだと分かりました。これからは小さなことに「なぜ？」と思えるようになって調べていきたいです。

2組 田島 舞 さん

私は始めて学芸員という仕事について知ることができました。そして学芸員という仕事について知ることができてよかったです。タランチュラは網を作らないということを知ってびっくりしました。学芸員という仕事は楽しそうだけど、大変な仕事だなと思いました。学芸員という仕事は研究の仕事だけじゃないのでびっくりしました。動物をむやみに殺したりするのはかわいそうだけど、資料として使われたり、交通事故で死んだ動物の死体が資料になるのはいいなと思いました。

2組 村上 歌蓮 さん

僕は標本にする動物が、いつ・どこでとったかの情報が大切で、それがなかったら「ゴミ」と同じということを知って、以前田代先生がおっしゃった樹木の標本と同じことだということに気がつきました。また、博物館はもともと資料を保管するところだったと聞いてびっくりしました。

他にも、クモの巣はお腹のすき具合で形を変えると聞いてこれもびっくりしました。魚は全く描けなかったもので、これからものをじっくり見て身近な疑問を持てるようにしたいと思います。Q講座の中でもすごく奥深くおもしろい授業でした。

2組 河上 亮 くん

お知らせ

春休みなどを利用して、博物館に出かけてみてはいかがでしょうか？清水さんのおられる熊本市立博物館では3月27日（日）に最新型プラネタリウムが完成し、リニューアルオープンします。3月26日（土）からは企画展「ガリレオの天体観測から400年 宇宙の謎を解き明かす」も催されています。

また、白山登山などでもお世話になった坂梨さんがおられる熊本県松橋収蔵庫では、現在企画展「ふしぎな鉱物の世界」が催されています。

質実剛健

自然と共に生きること

2月4日のQ講座は、1級建築士の古川 保さんをお迎えしました。古川さんは、『木の家(木造の家)』を推進しておられます。お仕事としてだけでなく、日本や世界の環境や自然を考えてのことです。日本人は古来木造の家を建てて、木のぬくもり、風通し、適度な湿度などを味わっていました。季節を感じながら、自然と共に生活をして来ていた、ということになります。人の手が入った森林では、木を切ることで自然保護になることも、以前勉強した通りでした。

東日本の大地震を見て、「いかに自然と共生するか」が、これからの日本のキーになるのではないかと感じずにはられません。

講師紹介

川尻町のすまい塾古川設計室の古川 保さんをお迎えして、山、木、家のお話をいただきました。古川さんご自身は佐賀の武雄高校ご出身で、熊本大学工学部土木・建築学科で勉強されました。当時の土木科はほとんどの人たちが、県庁などの役場に就職をされていたのですが、建築の道を選ばれました。高度成長期の「量産の時代」を経て、独立され、今に至られます。今回は、お忙しい中見本を持ってきていただいたり、プレゼンテーションや実験を使って分かりやすく説明してくださったりしました。



山、木、家のお話

熊本は「日本で4番目に杉の木が多い」県ということでした。しかし、「はげ山」が一番多いのは熊本、だそうです。

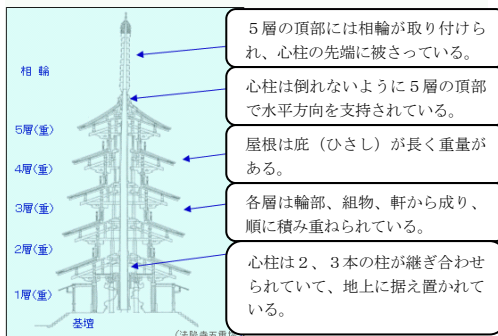
話は「木は切らないと環境破壊」ということから始まりました。以前「森林伐採は自然破壊か、自然保護か!？」というディベートをしましたが、その時の内容につながりました。つまり、熊本(日本)の森林は二次林(人の手が入った天然林)が多く、伐採をすることにより、自然循環が機能する、ということでした。

また、切ったら木を植えないで放置しておく、竹が増え、地滑りを起こしやすくなる、ということでした。これが「はげ山」となるのだそうです。

日本にはたくさん木の資源があるのに、8割を輸入に頼っているということでした。日本の木はほとんど切ること、自然が再生され、環境保護にもつながっているが、シベリアの凍土に生えている木を切ると、木がなくなることにより、保水できなくなり新しい木が生えにくくなる、ということで自然破壊につながるという、驚きの事実も話されました。

熱弁は更に続いて、「石油はあと50年。ウランもあと70年。しかし、木があるではないか!」ということでした。木という資源は尽きない。これをどんどん活用すべきだ、ということだと思えます。

奈良の五重塔にも触れられて、「原理はロケットよりもすごい」とおっしゃいました。固定されては無く、置いてあるだけの状態だが、それが効果的に働いて、地震があっても倒れにくくなっているということでした。



五重塔は、独立した5つの層が下から積み重ねられた構造をしています。各層が庇の長い大きな屋根を有していること、塔身の幅が上層ほど少しずつ狭くなっていること、中央を心柱が貫通していて、5層の頂部でのみ接していること、5層の頂部に長い相輪が取り付けられ、心柱の先端に被せられていることなど、他の建築物に見られない特徴を有しています(1)。これらの構造的特徴の全てが、五重塔の耐震性に深く関わっています。

参考: プラント地震防災アソシエイツ



2つのプラスチックの箱の全部の内壁に、1つは「木の板」を置き、もう一つには「クロス(壁紙)」を貼り、両方の箱の中央に

お湯の入ったコップを置いて、箱の中の温度と湿度の実験をされました。

種類		1回目	2回目	3回目
木	温度	22℃	23℃	23℃
	湿度	46%	52%	58%
クロス	温度	22℃	24℃	24℃
	湿度	46%	62%	70%

お話をされながら、途中で駒崎さんと夏目さんに指示され、3回計られました。芥川君と松嶋君には



実際に手を入れてもらい、感想を述べさせられました。二人とも「クロスの方が湿っている」と答えました。

また、木材にはよく「ひび」が入っていることにも触れられて、実験をされた結果、『ひびは強度に影響がない』ということも分かったそうです。

他にも、エアコンは扇風機の20倍電力がかかる、縁側のある家の良さとか樽と桶の違いなどいろいろな話をされました。

このように、こちらが驚くような内容や実験・データで裏付けられた資料や情報を基に、熱く語っていただきました。



このように、こちらが驚くような内容や実験・データで裏付けられた資料や情報を基に、熱く語っていただきました。

生徒の感想

今まで、家はヨーロッパから取り入れたようなやつに憧れていました。けれど、今日話を聞いて、古くから日本に伝わる木造建築に魅力を感じました。また、日本で一番はげ山が多い県が熊本だということに驚き、ショックを受けました。私たちにできることを考えていきたいです。(木村 菜比)

今日はすまい塾古川設計室の古川保さんが講師として、来てくださいました。木とクロスを貼った箱にお湯を入れ、湿度などを計る実験をしました。授業が終わってから、触らせてもらうと、クロスの方が本当に湿っていて、おもしろいなと思いました。木材の話など、いろいろな話が聞けなかったです。

(山田 莉奈)



私の家はほとんど木で作られている、昔の家で、五右衛門風呂もあります。そんな家は、湿度もそこまで上がらず、快適でありがたいなあと思いました。お風呂には、沸かすための薪が必要ですが、薪割りはお父さんに任せているので、たまには私もやってみようと思いました。(木村 真琴)

今日は、古川さんに、建築や日本の木などの話をしていただきました。日本の中でも九州が、上位に入るほど木が多いなんて初めて知ったので驚きました。外国の木は、切ると森林破壊になるけど、逆に日本の木は切ると森林保護になるということもびっくりしました。以前の授業で、見方によって、保護か破壊かは、変わることを知っていたけど、改めて保護になる理由が分かりました。

(藤川 昌美)

日本の大工さんは、千年以上も前に建物を揺らしたり、壊すことによって、地震から家を守るという技術の発見をしていたことにも驚きました。また、少しぐらいの値段の差で、切らなければいけない日本の木を使わずに、切つてはいけない外国の木を使うことはやめた方がよいと思いました。

(関 良朝)

探究レポート発表会

17号でお知らせしていました、「探究レポート」の発表会を行いました。3月1日(火)には『班・クラス発表会』、3月11日(金)には『学年発表会』を行いました。レポートの作成自体には、Q講座の時間を十分与えることができていなかったのも、どれくらいの発表かになるのか、見えない状態で3月1日の班・クラス発表会を迎えました。生活班ごとに分かれて、一人ずつ発表を始めましたが、みんなしっかり資料を作って来ていて、中には絵や写真、プレゼンテーションソフトを使った発表や



実験を取り入れた発表なども多く見られ、予想や期待を大きく超えた発表会になりました。

班で推薦された人たち(各クラス6人)がクラスでの発表会に臨みました。選りすぐられた発表者の発表は、更に見ごたえ、聞きごたえのあるものとなりました。発表者の努力や頑張りを受けて、聞いて審査する側の人みんなも一生懸命聞いていました。真剣と真剣のぶつかり合いで、とても充実した時間を過ごすことができました。



質実剛健

たくさんのニーズに応じて

2月11日のQ講座は、贅沢にもお二人の講師をお迎えしての職業講話でした。お一人目は熊本県警科捜研の水本光浩さん、お二人目は株式会社アンサーインターナショナル社長曾方 之さんでした。お二人とも宇土高校出身で、大きな舞台上で活躍をされていらっしゃいます。まさに、宇土中学校が目指す人材のお手本のような「先輩」のお二人でした。これまでも多くの方々の講話を聴く機会がありましたが、みなさんそれぞれの御苦労や喜び、やりがいがあり、それに触れることができた喜びや幸せを感じます。80人近くの生徒がいますが、どれかに必ず大きな興味や関心が芽生えたと思われま

科捜研の仕事



今回のお一人目の講師は、熊本県警察本部刑事部科学捜査研究所研究主幹水本光浩さんでした。水本さんは松橋出身で、宇土高校の第32回卒業生でいらっしゃいます。その後、熊本大学工学部機械工学科へ進

まれました。現在27年ご勤務されています。

県警の科学捜査研究所には以下の5つの係があるそうです。

係	人数	主な仕事内容
物理	3	火事の原因、交通事故の車の速度の調査、拳銃鑑定など
化学	6	覚醒剤などの分析
法医	7	DNA鑑定など、体に由来するもの
文書	3	筆跡鑑定など
心理		ホリグラフ検査(脈、発汗量で反応を見る)、プロファイリングなど

水本さんは物理係に所属されています。仕事内容は、主に上に書いているような内容だそうです。車の速度は、車のボディの変形やタイヤの痕跡を元に出すということでした。他に、防犯カメラの映像の処理、人物の身長 の推定などがあるとおっしゃいました。物理係に来る人たちは、機械、電気系統、物理系統の勉強をした人ということでした。他に、化学係は理学部、工学部、薬学部から来て、法医係は生物に関する知識が求められるため、理学部生物学科、獣医学科、薬学部から来るということでした。文書係には画像工学を学んで来る人、心理係には心理学を学んでくる人が多いということでした。

当日水本さんには、日頃持ち歩いていらっしゃるバッグを持ってきていただき、中のものを紹介してくださいました。中には以下のものが入っていました。

カメラ(フィルムを使うもの)、ストロボ、距離計、温度計、検電器、ノギス、タイヤの計圧器、太いチョーク、下げ振り(左の写真参照)

※ ノギス
水本さんの写真のようなデジタルタイプでした。



バッグは10kgくらいになるそうです。一つ一つ取り出して、それぞれの用途など丁寧に



に説明してくださいました。最後は、デジタルマイクロ

スコープを使って、「ペンチ」と「金切りばさみ」での針金の切断面の違いを見せてくださいました。ペンチは、刃と刃が合わさって『押し切る』タイプ。金切りばさみは刃と刃がすれ違っ て『挟み切る』タイプ。断面を大きく映し出して比較すると、違いがよく分かりました。



このように、物的証拠を集め、事故や事件の原因などを明らかにし、解決に向かわせる、とても大切な役割をされていることが分かりました。

生徒の感想

今日のQ講座は科捜研についてでした。「科捜研の女」というドラマは見たことがあるけど、実際にどんな仕事をしているかは初めて知りました。またマイクロスコープを使ったときは、針金をどんなものを使って切ったかが分かるので、とてもすごいと思いました。今日は1時間だけだったけど、おもしろかったです。(若田 隆太)

「科捜研」というところがあるというのは聞いたことがあり、テレビなどでも取り上げられることがよくありますが、実際にはどのようなことをしているところなのか知ったのは今日が初めてで、とても興味深かったです。事件や事故の原因を科学的に解明していくプロの方のお話を聞くと、スゴイなと思います。なぜなら、最先端の化学技術ももちろん活躍しますが、同時に人間の地道な努力もあるのだなと感じたからです。例えば、鉄線をどんな工具で切断したかを調べるときに、切られた鉄線とペンチやはさみなど様々な工具で切った鉄線とを1つ1つ比べていくという、とても時間のかかる作業。このような、科捜研の人の地道な努力によって、事件や事故の真実が明らかにされていきます。これは、とても素晴らしいことだと思います。(小田 崇仁)

印象に残ったことは、電池で針金が切れたことです。断面は平らになっていると思っていたら、ギザギザしていたのでびっくりしました。道具もいろいろあり、10kgほど持ち歩いていると言われた時は驚きました。距離計や検電器などいろいろあった中で、チョークが大きくて驚きました。科捜研のことが今日よく分かりました。

(岩崎 亜貴子)

今日の講話で、「科捜研」に興味を持つことができました。もともと、ミステリー系のことが好きな私は、将来警察など、事件を解決していくような職につきたいと思っていました。でも、科捜研で働く人にもなりたいたいなと思いました。私は、文書心理係になりたいです。なれるか分からないけど、今回の講師の水本さんは宇土高出身で、大大大先輩のような存在の方です。自分の将来について、興味を持つことができたので良かったです。(志土地 朱里)

私は、捜査する部の中で科捜研があり、そしてまた科捜研の中でも、いろいろな係に分けられているということを初めて知りました。一番印象に残ったことは、バッグの中に入っているものを見せてもらったところです。現場に行くだけで、そんなにいっぱいものを持っていくんだなあと思いました。針金など、小さなことも見落とさず、そこから事件解決に導いているのはすごいな、と思います。(吉窪 理々)

探究レポート発表会 Part 2

そして、3月11日(金)の『学年発表会』は、審査員に田代先生、国士舘大学から教育実習の事前訪問で来られていた伊藤さん(宇土高校卒業生)、1年部の先生方を迎え、視聴覚室で本格的に行われました。発表者は以下の7人でした。

順	生徒氏名	組	テーマ
1	河野寛大	1	和菓子の製造と原料
2	森島壮太郎	1	6-6ナイロンの合成
3	吉窪理々	2	色々な分子
4	安部友里菜	2	惑星の共通点
5	村上舞佳	1	白山登山
6	河上 亮	2	学芸員
7	高橋勇希	2	身の周りの界面活性剤

河野君はプレゼンテーションソフトを使い、和菓子の写真も取り入れ、自分で調べて新しく得た知識をみんなに紹介してくれました。森島君は、プレゼンテーションソフトを使い、実際に実験で6-6ナイロンを目の前で作ってくれました。驚きました。吉窪さんは手書きでまとめた資料を実物投影機で映し出し、声色を変えて二役で進行したり、分子の成り立ちを歌に乗せて、みんなに反復させたりしてインパクトのある発表でした。安部さんは、プレゼンテーションソフトと語り口調で太陽系の惑星たちのいろいろな性質や特徴を説明してくれました。村上さんは白山と轟水源と住民の人たちのつながりを、プレゼンテーションソフトで丁寧に説明してくれました。河上君は、口頭での発表で具体的な例(トイレの標識)を出しながら、学芸員の仕事や役割について説明してくれました。最後は高橋君が、プレゼンテーションソフトと実験を通して、身近な界面活性剤のことを話してくれました。

閉会式では、審査委員長田代先生の1人1人に対するコメントも交えての講評と結果発表を行いました。結果は、最優秀賞に高橋くん、優秀賞に森島くんと村上さんが輝きました。準備運営も総合的な学習の係で行い、まさに『手作り』の発表会でしたが、中身の濃いものとなりました。

もうすぐ2年生になりますが、このQ講座で培った『探究心』や『表現力』、『コミュニケーション能力』などを、更に高めて大きく成長して欲しいと願います。今回の発表会で、それが実現可能であると確信が持てました。

大きな森の小さな家

2月25日(金)のQ講座で、田代先生が春休みの宿題として読書感想文の課題を出されました。その読む本のタイトルが上記のものです。西部開拓時代のアメリカを舞台にしており、大きな森の小さな家での、ローラやお姉さんの"メアリー"、赤ちゃんの"キャリー"、そしてとうさん、かあさんの1年間の生活が描かれています。『自然との共生(大自然の中での生活)』のおもしろさ、厳しさが学べるのではないのでしょうか。

質実剛健

リーダー像

2月11日のQ講座のお二人目の講師は、株式会社アンサー・インターナショナル社長曾方 之さんでした。曾方さんは、小学5年生で「給料をもらわない仕事をする」と決められてから、自分のことには『責任』を持って生きて来られ、一人の起業家として、会社の発展に全力を注がれながらも、東京大学の特別講師としても活躍されています。講話は、自信にあふれた大きな声で、具体的な話で分かりやすく、時々ユーモアを取り入れ、キーワードを板書しながら話されました。「リーダーの姿」が見えたようでした。

起業家のお話

講師は株式会社アンサー・インターナショナルの曾方 之さんでした。曾方さんは第31回目の宇土高校の卒業生で、ご出身は網田です。動画配信サービスを九州で先駆的に開発した同社の技術は、大手冠婚葬祭会社をはじめ県内外の市町村の観光案内など多くのサイトにも採用されています。また、曾方さんは宮崎県観光コンベンション協会のウェブエグゼクティブプロデューサーに就任され、動画による観光地・特産品紹介サイト「観光TVみやざき」を立ち上げていらっしゃいます。

今春から採用予定の宮崎さん（東海大）と松本さん（崇城大）というお二人も、アシスタントとして連れて来ていらっしゃいました。曾方さんは他にも、東京大学特別講師、ロアッソ熊本ウェブ総合プロデューサーなどの肩書も持たれています。

(参照 くまもと経済)



「周りが認める大人」になる、ということでした。逆を言えば、20歳になっても、人のせいばかりして、責任が持てない人は「大人」とは言えないということになるようです。

次に、何かを始める時は、「やるぞ」と思う時がスタートということ、ケンタッキー・フライドチキンの創始者カーネル・サンダースさんを例に話されました。「フランチャイズ」という商法のアイデアを世界で初めて始めたのが彼だそうで、当時66歳だったそうです。

一方が自己の商号・商標などを使用する権利、自己の開発した商品（サービスを含む）を提供する権利、営業上のノウハウなどを提供し、これにより自己と同一のイメージ（ブランド）で営業を行わせ、他方が、これに対して対価（ロイヤルティー）を支払う約束によって成り立つ事業契約である。
(ウィキペディアより)

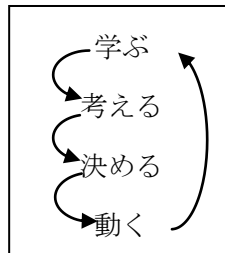
『「失敗した」という言葉をなくそう!』とおっしゃいました。「苦い経験をした」と考え、そこから学ばばいい!ということでした。

学ぶ→考える→決める→動く

曾方さんは、御自身の経験を基に、中学1年生でも分かるように、エピソードやキーワードを通してたくさんのメッセージをくださいました。

例えば、プロゴルファーの石川遼選手を例にして『早くやったから、早くになれる』という言葉で、「何事も早く始めれば、早く達成する可能性が高い」ということを話されました。『人がしないことを先にやった』から、成功を収めているということでした。現に、曾方さんの問いかけに一際大きな声で手を挙げた河野寛大君はお土産（タオル）を手に入れました。

また、『大人と子ども（小人）』の違いについても、御自身の娘さんの学生の頃のエピソードを交えながら、『言動に責任を持てるかどうか』が分かれ目だ、ということをお話されました。責任が持てる時に



教わったり、命令されてからするのではなく、自分から「学び」、それを基に「考え」、自分の意思を「決めて」「動く」ことが大切であり、「動いた」結果から、また「学ぶ」というサイクルを作る

ことで大きく成長できる、ということでした。

パイロットになりたいという夢を持った、失読症（書かれた文字を読む上での障害）のトーマス君が、後に『トップガン』という映画で、パイロット役で一躍スターへ駆け上がったトム・クルーズであった話や、「あなたの最高傑作は何ですか?」という問いかけに「Next one. (次の作品だよ。)」と答えた90

歳のチャールズ・チャップリンの話などもありました。どの話も、生徒たちの心をつかむものばかりでした。

他にも、ロアッソ熊本のガイドブックをくださったり、「運だめし」でじゃんけん大会をして勝った人には賞品（海苔やチョコQ）をあげられたりと、楽しい講話にみんな満足していました。そして、きっとみんなの心の中に『リーダー像』というものが芽生え始めたことでしょう。

生徒の感想

今日は、とてもおもしろい講話でした。特に、心に残ったのは、いじめなんか、おもしろくないことより、人をほめることをするということです。中学生では、人間同士なのでトラブルがあったりするので、その人を嫌ったりしないで、少しでも、ほめられるところを探したいです。また、仲の良い友だちの、いいことも探そうと思います。

（木村 真琴）

今回の話は、どれも、とても心に響きました。その中でも、1番心に残ったのは、「日本国憲法の大人」ではなく、「周りが認める大人」になるということです。日本国憲法での大人は、20歳になると誰でもなれます。しかし、周りが認める大人は、どんなに20歳になっても、自分が言うことに責任を持つことができれば、大人とは言えません。逆に、20歳になっただけでも、自分が言うことに責任が持てるのならば、「周りが認める大人」になれます。少し難しいけれど、私も自分が言うことに責任を持って、「周りが認める立派な大人」になりたいです。（竹下 柚香）



じゃんけん大会で優勝!! (竹下さん)

今日の講話は、とてもおもしろかったです。特に私になるほど!と思ったのは先生と生徒についてです。先生が説得したら生徒は納得する、ということと、先生が優秀だったら生徒もちゃんと理解できる、ということが1番なるほど、と思いました。やっぱり教える人が優秀ではないと教わる方も分からないし、教わる方も理解しよう、という気がないと理解できないと思います。両側にやる気がないと説得も納得もありません。だから、私たちはもっと努力していかなければ成らないと思いました。（佐藤 亜佳里）



お礼というより、感謝の言葉を述べました。（上村さん）

Q講座意識調査結果

「Q講座を閉講するにあたっての意識調査」を実施しました。

★全体をとおして

(1) 総合評価（地域学、宿泊教室、キャリア教育すべて）

- ①高く評価している ②評価している
③あまり評価していない ④評価できない

・・・平均1.3

(2) (1)の総合評価を100点満点で表現するとしたら何点つけますか。

・・・平均93.7点

★地域学について 自然を題材にした探究活動、ゼミ発表、国武さん・後藤さん・福島さんの講座

(3) 実施内容について

- ①満足している ②ほぼ満足している
③あまり満足できなかった ④満足していない

・・・平均1.4

(4) 分かりやすさについて

- ①とても分かりやすかった ②分かりやすかった
③あまり理解できなかった ④理解できなかった

・・・平均1.6

★宿泊教室について 御所浦の漁業体験、民泊、菊池の農業体験、事前活動としてのロープワーク・飯盒炊爨、タイケンを言葉・・・等の活動

(5) 実施内容について

- ①満足している ②ほぼ満足している
③あまり満足できなかった ④満足していない

・・・平均1.2

(6) 分かりやすさについて

- ①とても分かりやすかった ②分かりやすかった
③あまり理解できなかった ④理解できなかった

・・・平均1.3

★キャリア教育について 職業講話：考古学、まちづくり、和菓子職人、学芸員、建築士、科捜研職員、起業家の話

(7) 実施内容について

- ①満足している ②ほぼ満足している
③あまり満足できなかった ④満足していない

・・・平均1.3

(8) 分かりやすさについて

- ①とても分かりやすかった ②分かりやすかった
③あまり理解できなかった ④理解できなかった

・・・平均1.4

(2)以外は4段階評価ですが、「3」や「4」をつける生徒は一人もいませんでした。平均点もほとんどが「1点台前半」で、(2)の「100点満点の評価」でも、平均93.7点と驚異的と言ってもよいほどの結果となりました。有意義な学習であったと考えて良いようです。



質実剛健


『段取り力』


3月17日の3、4校時のQ講座では『クッキング・クラスマッチ』を行いました。振り返れば、10月の「菊池のんびり農村生活体験」での野外調理では、カレーライスとみそ汁という調理に時間がかかり、食べる頃には辺りは真っ暗になっていました。その作業の様子を見てみると、班が1つの組織体としてうまく機能していないようでした。リーダーが指示するでもなく、役割が明確に分担されているでもなく、急ぐでもなく。そこで、最後のQ講座で「段取りする力の大切さを知る」機会を設けました。

探究レポート発表会入賞者喜びの声

3月11日の「探究レポート学年発表会」での上位3名から、発表会を終えての感想や受賞の喜びの声などをいただいたので、紹介します。


最優秀賞

氏名 (組)	高橋 勇希 (2組)	
タイトル	身の回りの界面活性剤	
動機	国武先生の講話に興味を持ったから	
工夫したこと	図や実験をして、分かりやすくした。	
感想	実験を使ったのが正しくて、みんなに界面活性剤のことを知ってもらえたので、良かったです。また、最優秀賞もいただけたので、うれしかったです。	

氏名 (組)	村上 舞佳 (1組)	
タイトル	白山登山	
動機	白山がどのようにして宇土の人々と関ってきたかを知りたかったから	
工夫したこと	パワーポイントがゴチャゴチャして見にくくならないようにシンプルにまとめた。	
感想	まさか、受賞できるとは思わなかったの、受賞できてうれしいです。「見やすく、分かりやすく」というのは、思っていたより難しかったです。単語の意味などを詳しく調べられていなかったの、今後は細かいところまでしっかりと調べたいと思いました。	

こうして見ると、調べたことをうまく伝えるためには、やはり『段取り力』が必要だったようです。今回の発表会は、発表する側も聞く側も非常に有意義な機会になりました。

優秀賞

氏名 (組)	森島壮太郎 (1組)	
タイトル	6,6-ナイロンの合成	
動機	国武先生の動画を見て、どうやったらできるんだろうと思ったから	
工夫したこと	・どんなに簡単に説明しても難しくなるところがあったので省いた。 ・簡単にできない言葉は、たとえを使って説明した。	
感想	完成したぞ、と思い、発表前日の放課後になって、「まとめ・感想」を入れていないことに気づき、ギリギリ感想が少し書けたぐらいでした。まとめをしっかりと入れておけば、完璧?だったと思います。	

研究発表会の感想

今日は、Q講座の1年間のまとめの研究発表会がありました。やっぱり今日発表してくれた人たちは、クラス代表なのでみんなどれでもすごかったです。森島くんや高橋くんなどは、目の前で実際にやってくれたからすごく引きつけられました。理々ちゃんも自分でみんなを楽しませようとして、声を替えたりして、おもしろかったです。他の人たちも、パワーポイントを使って発表してくれたりして、分かりやすかったです。自分にとって勉強になったこともたくさんあり、良かったです。(明瀬 渚)

7人の発表は良かったと思います。分かりやすく発表しようと努力していたし、この前のクラス発表での改善をちゃんとしていたのが良かったなと思いました。私もそういう良いところは、まねできるようにしたいなと思いました。(村上 歌蓮)

今日の発表会では、クラス代表に選ばれただけ合って、すごい発表がたくさんあったと思います。実験を目の前でしてくれた人もいました。発表の内容を見ている人により伝えることができるので、とても良かったと思います。また、ほとんどの人は、パワーポイントでプレゼンテーションをしていましたが、河上くんだけが、機器を使わず、原稿や図などで分かりやすく説明しているのがすごいと思いました。(高木 悠成)

今回の宇土未来探究講座では、皆の発表のできに圧倒されました！もちろんパワーポイントなどのテクニックもすごいのですが、工夫が様々なところでなされていて、やっぱり宇土中生は違うなあと感じました・・・(笑)。特に感じたのは、実験や話しかけなどをして、聞き手を引きつけているところです。他にも、内容を深くまで理解して発表していたりなどして、見習いたいと思いました。今回皆から盗んだテクニックなどを、次に生かせたら良いと思っています。次の機会も楽しみです。(安部 絵里菜)

クッキング・クラスマッチ

3月17日(木)の3、4校時にクッキング・クラスマッチを行いました。各クラス5班に分かれて、ご飯とみそ汁と焼き餃子の調理と後片付けの時間を、「味」を加味して競いました。調理室の調理台と技術室の作業台の関係上、各クラス5班に分けることで、即席の班での協力や段取りの良さが試されることになりました。前日に各班でシミュレーションを行い、役割分担をして臨みました。



どの班も大きく分けて、ご飯係、みそ汁係、餃子係と分かれて作業を始めました。ご飯とみそ汁はストーブ(野外活動用の簡易なボンベのコン

ロ)を使って炊いたり、作ったりしました。ご飯係は炊けた合図を見たり、倒れてこぼれたりしないようにじっと見ておかなければいけませんでした。みそ汁係も出汁の炒り子を出すなど、鍋から離れられませんでした。そして、メインディッシュの焼き餃子ですが、家庭科の清水先生のレシピがあるとは言え、うまくいくのか心配しながら、作業を進めました。餃子は、切る材料も割りもあり、練ったり、包んだりといろんな手間があり(それを狙って選んだのですが)、ここで各班の段取りの良さが見えてきます。作業が終わった者から皮で具を包んだり、皿に並べたり、家庭科室に焼き



に行ったり、と上手く役割り分担が機能していたりしていたようでした。男子を上手に使う女子がいたり、手際が良い男子がいたり、各班特徴があつておもしろかったです。

「クッキング・クラスマッチをやって良かったな」と思った瞬間は、『準備をしている横で片付けも同時進行している場面を見たとき』でした。まさに、段取り力がアップした証拠でした。

今回の採点の方法は以下の通りでした。

「準備時間(分)」+「後片付け時間(分)」
-「ご飯と焼き餃子のおいしさのポイント(1点=1分)」

※食べる時間は、競技に含まない

おいしさのポイントの算出方法は、7名の先生方(上川教頭、飯田、田代、一司、松山、吉永、松原)が一人一人各班のご飯と焼き餃子を食べて、3段階(「とてもおいしい」、「おいしい」、「ややおいしい」)で評価したものを合計する、というものでした。審査員の先生方は、「おいしい!」、「こりゃ差がつかん」と言いながら、真剣に評価されました。



作ったみんなも「おいしい」と言いながら、楽しそうに食べていました。各班おのおの「ごちそうさま」をしてから、後片付けに入りました。各班役割を分担し、手際良く作業を進めました。中には「クラスマッチだから他の班を手伝ってもいいですか?」という意見も出たくらい、真剣に取り組んでいました。この日は短縮授業ということもあり、昼休み、掃除時間にもかかってしまいましたが、無事に終了しました。

そして、結果は以下のとおりとなりました。

優勝クラス

1年2組

最優秀班

1年2組5班 (記録53分)

優秀班

1年1組5班 (記録65分)

1年1組2班 (記録66分)

この1回のクラスマッチで、5月の「阿蘇自己再発見キャンプ」は大丈夫、と断言することはできないかもしれませんが、多くのヒントやコツをつかみ、『段取り力』のアップが図れた生徒は少なくなかったのではないのでしょうか。この力を、今後いろんな場面で見せてくれることを期待します。

おわりに・・・

なかなかタイムリーに発行できませんでしたが、ご愛読ありがとうございます。感想等もお聞かせください。